

塔柳川

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十六年八月二十五日 印刷
昭和四十六年九月一日發行 (每月一日發行)
創刊大正十三年 通卷五三二号



No. 532

九月号



タッチでえらべば
やっぱりサコム



サンヨー電子式計算機

サコム
SACOM

見やすい設計 IGC-162型 280,000円
平面表示ゼロサプレス・%キー付き
16ケタ2メモリー高級品
SANYO 三洋電機株式会社



豚饅・焼売・焼餃子

大阪・なんば



TEL (641) 0551~2

出張販売店

なんば高島屋/虹のまち鹿鳴/心齋橋そごう/梅田阪神/天満橋松坂屋
京阪デパート/堂島地下センター/弁天阜頭支店/中之島サン・ストア

少女回顧老妻に松江の片日照り
生きてゆく宿命にも似た横車

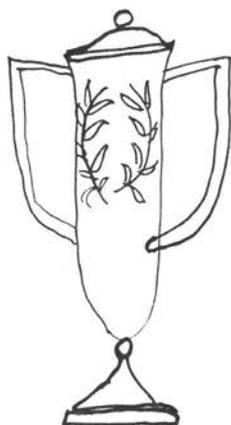
ひん曲つた信念とやらで乗り遅れ

にこりともせぬ貫録で医師倫理

山下清君を悼む

お浄土は兵隊の位のいらぬとこ

中島生々庵



κ.

山下清君

山下清君がひょっこり長逝した。余り突然だったので、この暑さのための事故死でもと思つた程だった。十年前一緒に欧州旅行した折の事が思い出されたからである。脂肪肥りの清君は殊の外のあつがり屋で、飛行機パスホテルの宿泊美術館の見学等々人一倍窮屈であり暑さがこたえたらしく、時々痲癩に似た不機嫌さを爆発させることもあった。男と女とはどっちが偉いのかなあ。男はこんな服装しているのに女はなぜ柔な服を着てもかまわないだらうね。こんな風に同じことを毎日

毎日、または一日に数回となく質問をくり返えし、こちらがやり込められるのもしばしばあった。なぜ、どうして、それは人事だろうが昆虫だろうが景色だろうが徹底的に見つめ納得ゆくまで突込んで考え、そのあげく自分の頭で完全に消化したものを精確に表現する非凡さを持つていたからである。私はいつも澄んだあの目、真摯に見つめるあの目を私の作句の上に少しでも学びとりたいと念願していた。稍々猫背の清君は今頃どの辺を歩いているのだろう。

座右の句

その日ぐらしの軒に雀がこぼるるよ (路郎)

私の句

人生のブレイキせつない音を吐く

岡崎祥月

川柳塔九月号目次

山下清君……………題字・中島生々庵・表紙・直原玉青
中島生々庵選……………(1)

川柳塔……………同人作品……………中島生々庵選……………(4)

川柳忌に憶う……………橘高薫風……………(2)

川傍柳初篇研究……………(九十八)……………博美・藤井 和雄

前田喜代人・故岡崎 重義・清
川端 柳風・故高須唾三味・丸

十府・岡田 甫

「旅人」以後の麻生路郎作品……………(11)……………傍島静馬……………(19)

近作柳樽……………(同人吟)……………川村好郎選……………(30)

秀句鑑賞……………(近作柳樽)……………若本多久志……………(28)

満洲走馬燈……………(近作柳樽)……………浜田久米雄……………(29)

麻生路郎七回忌川柳大会……………(40)……………東野大八……………(22)

川柳は「おこ」の文学か……………(47)……………石崎柳石……………(24)

近詠……………(47)

川柳忌に憶う

橘高薫風

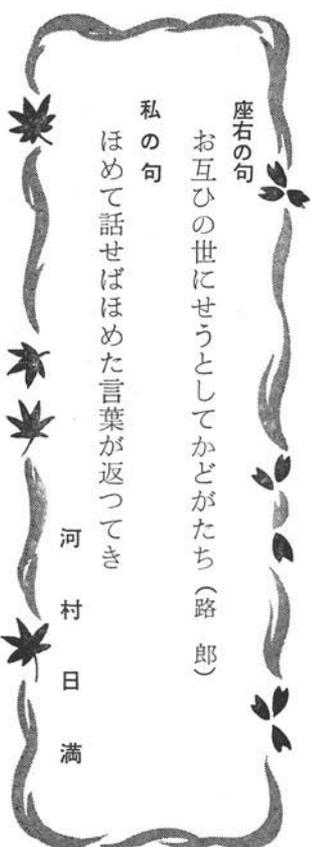
九月は川柳忌の月である。今年も各地で種々の意義ある催しが開かれることであろう。

柳祖は寛政二年の九月二十三日に七十三才で江戸で没した。その公正適確な選句により、名選者の榮譽をほいままにして、最高時には一万七千を越える句の応募があったという。本業は世襲の江戸浅草竜宝寺門前町の名主であったから、これの選句には、余程の肉体的、精神的消耗を要したであろう。

路郎先生の選句も定評があった。私は、川柳雑誌の編集局に入った当時、丁度発刊されて間もない句集「私達」の句稿が部屋の隅に嵩く積まれてあるのを見て、適当量帰宅時に持ち帰っては、路郎先生の選のあとを吟味検討した。初稿、二稿、三稿と朱筆で句が削られて行く様子が、まるで粒選りの真珠が厳選の後に残る鮮やかさに似ていて、痛快そのものであった。初心者にはよく多読多作を奨めるものだが、佳句の鑑賞、解説とともに、名

のある選者の選句を反芻することもよい勉強

川柳五十三次……(十二)	富士野鞍馬……(38)
水に生まれ	高鷲亜鈍……(23)
或る日の思い出……	福井野迷路……(25)
料理と川柳	光武弦太郎……(26)
柳翁の一面……	吉田水車……(26)
桜川不水逝く……	国弘半休門……(27)
大阪文化祭川柳大会・提言……	本多柳志……(42)
柳々会小浜紀行……	西尾菜……(44)
初歩教室……	本田恵二朗……(50)
大萬川柳「片思い」……	川村好郎選……(52)
川柳家の暦……(九月生まれの人)……遺稿	清水白柳……(46)
柳界展望……	(薫風)……(56)
本社八月句会……	(庸佑)……(58)
各地柳壇……	(文秋)……(61)
一路集「手相」……	吉田圭井堂選……(48)
「茶」	麻生アト選……(48)
「柱」……	佐野ト占選……(49)
編集後記……	(二三夫・葉子)……(65)



の一つである。私が選者に推された時、今は故人の後藤梅志氏から路郎先生に「待った」がかかったそうである。「川柳を始めて数年のものに選をさせられては、何十年この道で苦勞をしている者の立つ瀬がなかるう」というのである。若造に洗練された句の味が判るものかといった老作家の感慨であつたらう。このように、その当時の川柳雑誌には、いうにえない厳しいものがあつた。路郎先生ご自身も不朽桐句帖に掲載する句は、葎乃先生か、編集局の誰かに一応の選をさせられて、自選の弊を戒めておられた。

近來、川柳公害説なるものが云々されるようになったが、それは、自選の弊と、一部有名作家の句風に迎合する選者の見識のなさに起因していることは明らかで、川柳を作ることと、選をするということは全く違つた作業であるにかかわらず、同一の人の間で行なわれていることも川柳界の質の低下を余儀なくされている一因のように思われる。

先日出版された清水白柳遺句集の中でも白眉の句だが

恩のある人の娘を嫌いぬき

の佳句は昭和二十九年九月十一日光明寺で開催された川柳雑誌社川柳忌句会の兼題「恩」路郎選での天位の句であつた。路郎先生の目は天網のごとく佳句を失することがなかつた



中島生々庵選

島根県 小砂白汀

見る方の角度で虹に見える雨
嫌われて激流ただの水になり
揚げ花火亡びるものの美しさ
摺り切れた絆つくろう糸さがす
葉を虫に喰われ絵になる蔦かずら

京都府 都倉求芽

ゴム印のタコに実印は当らない
むき出しの刺をサポテン愛される
取り替えられるまで歯車噛み合わず
不機嫌な顔を鏡に叱られる

終戦記念日

炊きたてが食べにくいとは罰あたり

大阪府 正本水客

聞耳をたてて雰囲気から遠く
悲みに沈んでいても髭がのび
長生きをしすぎましたという握手
無駄足をしたとは余生思われず
坂上りつめて渴いた虹になる

前号訂正・真直ぐな道ところが重たくて

八尾市 香川酔々

洗濯機の渦から妻の詩が生まれ
犬小屋へ犬が逃げ込むゴムホース
蚊の声と潮騒を聞くひとり旅
スモッグの隅に夕顔沈んでる
ダムの水とは知らず夕河鹿

飲み仲間ぶつぶつと言うて来る
岡山県 浜田久米雄

おとなしい顔して指名手配され

全国区そんな方とは知らず入れ

大笑いしたいがひとりではできず

ごまかした金と愛人知らず住み

青森市 工藤 甲吉

お互いに生きとし生きて笑い合い

げんまんをしたひと今は笑うのみ

ゴキブリの悪党ぶりに教えられ

税務署を勝った余勢で飲み過ぎ

出る金は一年三百六十五

倉敷市 本田 恵二朗

活け終えてしばし見惚れる小さい幸

交通遺児のかなしいまでに澄んだ目よ

今にして思えばとんだまわり道

核家族父の日の父ほっとかれ

星空を画布にして描く母の顔

大阪市 金井 文秋

金と役持って貫録付いてくる

呑んべえに嫁いだ娘等の父飲まず

ゲストなら行く気へ呼びに来てくれず

一ト言が多くて女にももてず

入歯とも知らず歯並びほめてくれ

大阪市 西出 一栄

白柳遺句集を手にして(二句)

遺句集の題字悲しく凝視する

暗記している句もあり感無量

指切りをしたよに梅雨を病みつづけ

注射針が細き血管もてあまし

手折られてあじさい花瓶でうなだれる

倉吉市 奥谷 弘朗

やんわりと来る要求に弱いパパ

人間の条件五十にして迷い

踊りの輪抜けて恋仲蚊にくわれ

精いっぱい生きる心が素晴らしい

生抜いた捕虜の体験無駄にせず

島根県 堀江 正朗

路郎忌へ薫風先生のお迎えを受けて(二句)

路郎忌へ朝風呂たてて迎えられ

一年分の声聞き貯める手の温味

天気予報子の心さえ分らぬに

トタン屋根玉子焼でも出来そうな

夏布団足の枕で夜が明ける

大阪市 本多 柳志

読む自由捨てる自由へピラをくれ

ふん切りの悪さをぜい竹に叱られる

古くとも先祖の知恵で梅を漬け

路郎忌

従いて来し路の長さも七年目

焼香のどれもいささか禿げており

愛媛県

村上旭童

まず使ておいてもうける氣の男

血も吸わぬうちにびしゃりと目衝権

完全にいかれた形で夏の猫

お昼寝の味が僕にも解りかけ

会社やめたら釣にいく氣の人でした

伊丹市

小川静観堂

かにかくにハイミスの過去知れわたり

昔ならば詰腹だろうにバッジつけ

正面きってちらつかしてゐるミニの膝

八十三才翁

春の坂道八十年こんなとこ

クーラーが動き出すまでの窓を開け

高槻市

傍島静馬

生流転どこまで続く老の坂

父死んで酒屋の得意一つ減り

病臥してつくづく妻の有難さ

雨蛙の思い通りに降らぬなり

長尻へ仲居隣りを掃きはじめ

倉敷市

藤井春日

世は移り晴耕雨読許されず

退職金雀の涙で功を賞め

ふる里を遠く逃げたい過去があり

物言えば錢の匂いの大阪弁

且さんに介抱さす氣の三味を置き

小松市

浅野芳朗

女事務恋の受話器を手で包み

劍幕が僕の道理をはね飛ばし

踏切番たまには赤色振りたかろ

貰い猫末ッ子のいう名に決まり

朝顔の執念すがるもの見つけ

大阪市

橘高薫風

路郎忌に塔の影なす酒の壘

路郎の忌 句を奉り香華とす

路郎の忌 天牛に来て落着きぬ

白桃とわれと含羞む恋の前

胃を切除って夏冬ながし誕生日

大阪市

不二田一三夫

ノーマネーそんな時には空を見る

段違い平行棒だね ノミ夫婦

象の目に敵を憎しむ色がない

寄席(二句)

兄妹にしておく人気上昇中

笑わないしぶとい客をもてあまし

豊中市 戸田古方

老人に通じる親切とは嬉し

梅雨と台風ここはきつちりくるところ

そのモデルこいさんという顔でなし

谷あり丘あり私の皺も頼もしく

倉敷市 田垣方大

手帳こまごまやりくりしています

鍵東に守衛の日課始まりぬ

成仏をせよとは金魚のことだった

夫婦の目合って友人帰される

大阪市 大坂形水

年寄りの体無視する冷房車

クーラーが肌ぬぎで飲む良さ失くす

コンピューターレジャー産業買えと出た

麻雀屋始めまあまあ食べてます

鳥取市 河村日満

参議院選雑観

棄権することも権利とおどかさ

公明選挙アハハと世間受けつけず

M候補大勝

人相が助けた票やなと思ひ
ソユーズ11号の死の帰還に

生きて帰るが当然の如おもいしに

岸和田市 高橋操子

ガンと知るいのちを無駄にせぬ正座

買って来たホテルのいのち淋しがり

流行を置いて別荘の娘がかえり

非常口こんなはしごは降りられず

堺市 吉田圭井堂

敷八で片づける側は従三位

古稀近く今年の花は今年みる

望まれて嫁たことだけを覚えとり

背景を取れば呆れた木偶の坊

大阪市 山川阿茶

寝たきりはこの世ながらの檜山か

人一人逢わぬ階段下りてゆき

サンキューじゃ礼を云われた気になれず

路郎先生七回忌

出雲市 尼緑之助

太陽をはじめてお米の木がんばる

鶏ずらり並んで味気なき産卵

朝のあいさつただけぬアイシャドウ

路郎忌

師をしのぶ集い芭蕉碑のある寺院

堺市 河内 天笑

落武者の鎧に似たり蟬の殻
節約を忘れた頃の不況風

デパートで定価だけ見て問屋街
金持ちの屋敷でケチを習うて来

神戸市 仲 どんたく

葬儀社の声てきばきと棺が出る

受話機取り合うて娘の声孫の声

ほんとうはどんな顔かなつけ睫毛

顧問と云う名で人生へ執着し

富田林市 岩田 美代

観音の慈悲に洩れじと寄進する

合掌と書いて寺から寄附便り

愛ひとつ未完にするから美しい

再発へ医師が無情の白い旗

大阪市 福井野 迷路

我が家の客(二句)

蚊の哀れ満腹の血を叩かれて

ごきぶりへの怒り脚が速過ぎて

煌々の月に流転の詩を読む

人生の縮図を写す選挙戦

大阪市 木村 水洞

嘘をつく必要がない暮し向き

悟れない同士で長屋住みやすく

大臣を呼び捨てにして涼み台

銀婚

へそくりの額を告げあう仲になり

愛媛県 渡辺 曉童

八宗兼学酒にビールにウイスキー

どっちゃんも骨ひらう気でいる老夫婦

世故にたけたる掌の艶

思うたつばに落ちこんでくる

松江市 中川 晃男

人生を複雑にする天の邪鬼

合槌を打ったばかりに巻き込まれ

拍手して別に賛成して居らず

ひまわりの権利あまねく陽を受ける

桜井市 岩本 雀踊子

月給がススリ泣いてる貨幣価値

とかげチロチロなまけ者と見た昼寝

喜びをかくし切れぬも母の年

異国の暮標は日本の空を向き

米子市 林 瑞枝

腹立ちを唾になり切る娘で利口

生きて居る証し歯痛に肩の凝り

詩を詠んで素直に不具の娘が育ち

地図指してハワイは夢でないところ

箕岡市 木山遠二

上を向けば俺にも青い空はある

たっしやであれと枸杞や梅酒が云うてくれ

アンテナの枝へ一番星が咲き

明星の他は知らない星ばかり

京都市 松川杜的

秋芳洞の旅に（会社慰安旅行）

馬の合う旅好きが居て救われる

無芸の悲哀ひとしお新入社

乾杯のその手へ冷たい眼を集め

カンナ真赤に車窓に揺れて旅終る

竹原市 山内静水

路郎師七回忌参列

孫弟子の弟子も供える七回忌

検札へ今月限りの職務パス

夫婦相和し末ッ子にひやかされ

鉢に水やる出勤へ五分ある

倉敷市 水粉千翁

足跡を踏まさぬ父として慕い

朝顔のさだめは云わぬ彩で咲き

責任を果し茶漬けの音となり

前言の取り消し方でもめている

門真市 福島鉄児

女世帯亡父の標札かけたまま

八〇キロの身が骨壺に納まれり

雨の三輪明神にて（二句）

梅雨空を突きさすように杉木立

五月雨へ参道過疎の景になり

高槻市 若柳潮花

もう膝も崩せぬ仲になり疎遠

真実を突かれ噂にして逃れ

菊植えて秋を楽しむ歳になり

麻生路郎七回忌にて

俤がほころび燈明が揺れる

岡山市 大森娛句楽

食べさしの西瓜と知らずキリギリス

向き合うたカエルの形でご挨拶

方言がヤット解って笑い合い

朝靄の耳を突き刺す時鳥

大阪市 児島与呂志

よう持ったもんや銀婚近うなり

もう梅雨が明けたやろうに氣象台

招待券使用ぎりぎりになって呉れ

朝顔のふたばついでむ町の雀

神戸市 小 浜 牧 人

連署判押して再起の手を握り

ドック入りまだまだ花を咲かす気だ

有為転変指のダイヤが消えている

クローズアップすれば欠点ばかり見え

今治市 越 智 一 水

死んでいる川で雑草花をつけ

降るときに雨降ってくれ有難う

いい妻が夫を立てるところで立て

宿直のひとりへ月がきれい過ぎ

藤井寺市 西 い わ を

雲丹とろりとろりわさびの利きもよし

怒られてばかりと夫婦仲が良し

足が出ておたまじゃくしの名が消える

修学院離宮

北山の峯一条に庭つづき

岸和田市 福 浦 勝 晴

七転び八起きはキックボクシング

生きたとは長屋の隅で貼る封筒

さりげなく切手をなめて離縁状

噴水のぐるりを歩いて読む詩集

倉敷市 小 野 克 枝

よそ様に上げる娘を叱りつけ

忍耐の心を欲に切り変える

失敗を黙って見てるこわい人

いつまでも女でいたい花を活け

米子市 八 木 千 代

郵便受孫の育ちが今日も着き

つましい夢それぞれに子らの文

一瞬の利に濁らせた胸を恥じ

心の灯消すまい風に身構える

大阪市 江 城 修 史

一人逝く旅路へ無情の雨しぶく

精一杯生きて無欲とも見られ

由緒ある家系を子等は煙たがり

歩巾合せて合せて及ばぬ友と知り

兵庫県 大 江 秋 月

お隣の庭の緑を吸うて朝

座っても立っても急行券同じ

ゆれるバス上手にこなす名ガイド

繰り返し繰り返し嘘聞いてやり

大阪市 中 川 滋 雀

中年のつもりぬけぬけサバも読み

耳よりな話は膝からのつてゆき
どぶ河へ砕けぬ月のきれいすぎ
やめられぬ弱さ煙草をみつけれ

倉敷市 野田素身郎

観点を交えて理由づけができ
管理職暑さに耐えている背広
虫歯一本夏の夜がまだ明けぬ
夏ばてにちいさな義理を一つ欠き

高槻市 山田季賛

理髪屋で白髪ふえたと笑われる
好きな道選ぶ苦勞を父とする
何ごとも割り切れるご身分うらやまれ
コップ酒今日のうまさの無事祝う

東大阪市 竹中綾女

長旅の退屈救った国自慢
防雪林あるのを知った北の旅
とど松の枝豪雪に下を向き
明日は去る仙台の街でこけしよる

東大阪市 竹中肖二

ご先祖の墓へ梟が来て鳴いた
原始林菌朶深々と地を覆う
残雪の裾につつまし水芭蕉

洞窟の石仏蔭に覗かれる

下関市 志賀木石

酔酩を致しましたと確かなり
肩書きが安月給を我慢させ
ついてない日を慰ぐさめる妻の酌
二番目を走って避ける風当り

広島県 高橋鬼焼

風りんの音へてごろな風が吹き
ヒョロヒョロと伸びて真夏の陽に負けず
思い出は晴着に残る酒の染み
この職へ頼るほかなし重い靴

大阪市 宮尾あいき

風がなぶるそのほつれ毛も白髪です
なるようになると知ってて又思案
たまに病めば息子も可愛い事を云い
ボーナス日母へ風鈴買って来る

大阪市 小出智子

ありし日の母を偲びてすしを巻く
かかるとき嘘にも女すくわれる
名曲にわが残り火をたぎらせる
雷雨激しく心奢れるわれを打つ

東京都 増田次章

參觀日親を品評してゐる子ら

あの社長別人にする庭いじり

おしゃべりのかたまりのまま娘らは下車
産院の中で親バカ誕生す

倉敷市 松下梁水

裏木戸で妻を待つ日ののどかなり

土壇場へもう気休めでない祈り

石一つ投げて未練を断てる恋

ライバルの矢にも気付かぬ有頂天

竹原市 森井菁居

良識派かかる世相に牛耳られ

多数決言いたい事は言っておく

メダカにも隊長が居て列を組み

保険医総辞退

腹痛の児へ初診料言うとれず

貝塚市 野坂つき子

猛暑にも負けずひまわり咲きほこり

サングラスかけて逃避をしたつもり

週末の一人歩きのおぼらしさ

女系家族大工の真似も板につき

大阪市 西川誓二

幽冥の父在さばと年を繰る

朝顔の庭に涼しさ教えられ

お互に一生の不作と笑い合い
あれきりで路傍の人か胸うづく

倉敷市 竹内翁童

ご家族の趣味も調べたつけ届け

冷房もあるから背広持ち歩く

寡婦として生きる自信の通夜の席

生きていることがすまない手をやかせ

香川県 岡田拳法

辞めようと何度か思った勤続賞

正論も世辞で飾れば通りけり

お役所の合理化こちらは手数ふえ

有利なら構想もなく手をつなぎ

岡山県 出原敬一

人間の屑に一時は名を連ね

吸殻をへし曲げ旦那に長電話

ぬかるみを越えた足跡ふり返り

酒飲みにこりた家内の婿選び

笠岡市 松本忠三

素ッ裸になった途端に客が来る

贅肉の鴨をホステス包囲する

かけ声の割に後押ししてくれず
せめてもの抵抗尻尾で蠅を追

箕岡市 木山要次

老妻を或る日女と意識する

貧しさを手伝うように蜘蛛の糸

表情も変らぬ人に触れ難し

結び目も妻の個性のある結び

堺市 吉岡青香

ゆずり合う座席かけるに困る中

他愛ない口げんかもよし老夫婦

未だ残る意地が五尺を支えてる

巻き返えず自信無気味に負けている

兵庫県 遠山可住

退職の子守は髭をつけたまま

金まわりよろし夫婦げんか絶え

空かんの底に子子の世界

お坊っちゃんには星は語らず

倉敷市 小幡里風

前身を洗えば同じ釜の飯

人ごみの中へ孤独がふとまぎれ

スラム街バックに何かを企める

逆算をして帳尻を合わさねば

責任は一番下の判が取り

大型保険妻の賛成ちと淋し

付添の顔も良くなる快復期

蠅打ちを握れば蠅のよりつかず

諫早市 原田明春

当てにして買い込みボーナスでは足らず

出世どころか停年という年になり

もらう気になったが相手みつからず

まいどとも言えず葬儀屋手を合わせ

倉敷市 谷井扇水

廻り道してもネオンの道は避け

先頭を奪えばメガネの度が合わず

道問えば検問所も云うて呉れ

勘定書へ口止め料も入れておき

岡山県 直原七面山

もう一押しされたら堕ちたにと女

ひたむきな愛へ男として報い

逢える日の頁を女繰ってみる

岡山県 池田古心

凡人でよかった訪う人無く昼寝

エビで鯛釣る気が鯛にされていた

宇部市 平田実男

働けど働けど啄木と同じ運

大阪市 天正千梢

無智か怠慢かナンセンスとして眺め
実行の出来ぬ号令ベッドから
弱みそやとクローラーに笑われる

奈良県 石倉旅風

ベレー帽横ちょに若い気を残し
鯉幟雲の流れを瀬に見立て
正直に今年もつづく梅雨の雨

高槻市 福田丁路

酔えば出る戦いすんで日が暮れて
夕映と共に時雨れる山の里
晩酌はなくとも孫が膝に居り

姫路市 隠岐不酔

ご機嫌がよいのか犬と話してる
若僧も名代と言う床柱
釣合がどうのと親は断る気

大阪市 西田柳宏子

社内慰安バス旅行
お手洗休憩毎に缶ビール

堺臨海工業地帯
排気ガス徒歩がみじめな汗をかき

もと海のどのへんだらうと踏んでみる

大阪市 水谷竹莊

出張のプラン浮気の日も入れる
定年退職昼も浴衣で暮される
おみやげの折は中まで酔いくずれ

和歌山市 垂井葵水

旅の目にこんなとこまで造成地
市場籠腕に女の強さ見せ
風鈴をせかせて風のむきかわり

大阪市 河井庸佑

近頃の若い者はとまたも愚痴
山っ気を出したとたんにたたかれる
救いようないのを救う策を練り

鹿児島市 土岐トク子

さいごまで小言云わずに無心きき
うろたえる母に二十の手がのびる
老朽化端然とあり書架と剣

松江市 岡崎祥月

雲の峰見上げ希望をまだ捨てず
読経の最中恩師の声がした
穂の切れた筆で短冊生きてきた

大阪市 有信新之助

あのコ面喰いやでと囁かれ
まだ歌かとテレビを切つて留守居番
千円の筆に手の方固くなり

大阪市 河村 瑞川

麻を着て涼しく生きる八十才
生きて居るただそれだけの事なのさ
七回忌弟子の声々きこしめせ

西宮市 藤村 女

べそかいてやつと頷く孫いとし
手を振ってくれる故郷の小きな駅
どん帳が降りて互に涙ふき

東大阪市 宮西 弥生

見栄捨ててから背のびの無駄を知り
京の庭みな善人にして帰えし
さりげない別れを追うて便り来る

大阪市 河野 君子

風鈴が一役買つてる古都の茶屋
女心を変えたか百円化粧品
お七夜の母は聖母に勝る貌

松江市 柳 楽 鶴丸

蛙の声今年が最後かも知れず
新築の柱借金の匂いにする

何時まででも歌のおばさんでほしかった

重苦し会議垂れこむ梅雨に似て
内閣改造に思う
平田市 久家代 仕男

人形の着せ替え目先を変えただけ
渡り鳥日本楽土と見てくれず

松江市 小林 孤呂二

庶民にもどり仏壇に灯をいれる
蚊帳をつるときは柔かい声になり
石仏苔むしそれからが坂

大阪市 宮地 双楽

野暮なこと云わぬ祇園の客そろい
過疎の村淋しくバス停草うもれ
夕立ちの後ナイターの緑さえ

松江市 恒松 町紅

ホットパンツに見とれて連れを見失い
お日様に勿体ないが昼寝する
もう一つ泊れと大阪ネオンの灯

堺市 高橋 千万子

傷心の夜路木蓮の白が落つ
願かける素足の女赤い爪
うすものの和服にすきのない女

姫路市 村上春巳

齒を磨きながら空の青探して

お稚児さんに革靴履かせて昭和ママ
俺の城わたしの城です倦怠期

マイカーを降りて花火を買う父子

鳥取県 森田布堂

カラーテレビ買えとあっさり子供言い

和歌山市 野村太茂津

原点に戻らぬままの日の模索

あのときのあの失言が落選し
詫びられぬ意地肩書にある頑固
路郎先生七回忌

その夜だけ烈婦にさせた妻の顔

師のあとに続く足跡絶えまなし

十年の知己に出会った初対面

奈良県 草深醉升

大阪市 川口弘生

巻手紙珍らしがって判読し

立板に水とお世辞をまくしたて
風鈴の余韻を引いて風が抜け

急な坂斜めに道を取るも齡

筆不精ですと長々書き列ね

医師大会白髪が目立つ総辞退

守口市 羽原静歩

大阪市 平井露芦

一粒も無駄なく倉庫に米眠り

生きのびた昨日へ今日の掌をあわせ
返らない昔へダムの水が澄み

腹の虫もP・P・Mにやられそう

黒板のメモがわびしい梅雨の朝

金魚のふん切れたところで孤独なり

鳥取県 清水一保

芦屋市 丸川初甫

新米にありつく旅の米どころ

討論も楽しからずや子と対話
追伸の方へ真意をみんな書き

しきたりは明治の型で楚楚と住み

海で見た顔夏山で又出会い

一人居の昼もやっぱりお茶を入れ

大阪市 室谷徹舟

富田田市 浅川八郎

老母だけに筆まめなうちの人の

夏山を下りれば元の暑さ待ち
ホステスが金のなる木へしがみつ

ボスの名が並ぶ花輪の蔭で飲む

尼崎市 高津徹也

行き届く配慮と思う席につき

時めくも時めかないも金次第

ここという時に勝気がわざわいし

小松市 馬場魚山

バリケードの心算かずらりバラを植え

旅行には行けぬ身旅の本を買い

子のいない女しやに無二蓄めて生き

兵庫県 河原みのる

やっところさうちの胡瓜にたどりつき

おやおやおや折り込み無い日もあるのなら

篠山線廢止近し

座り込みも出来ず保線もほっとけず

大阪市 今西章雅

皆落選今年の僕の投票者

好き勝手云わせて置けばつけ上がり

梅雨時のこくしで洗濯機が停り

堺市 伏見茂美

お茶漬の味と夫は一人決め

残り火の色気がさせる薄化粧

面売りの老婆も能の面になる

胸上げにピタリ呼吸が合った幸

手心のちとこみ過ぎて疑われ

自画自賛なんとか消光まかり在り

大田市 藤田軒太楼

ニコチンのくさい童話で子が寝入り

立読みへ本屋の箒足に来る

病院の粗食カロリーの名にかくれ

新宮市 大矢十郎

花嫁の父新郎の手を握り

下戸一人俺にコーラを注ぐ仲居

父に似た猫背を父に叱られる

大阪市 河股緑水

年令は不問と折込み募集欄

ピンボケの方が入選した便り

大丸の横で孫への兜虫

東大阪市 斎藤三十四

扇風器止めてうちわを持って寝る

目をつむって今日のパノラマ繰り返す

自転車に雞のいのちは逆さにし

鳥取県 鈴木村諷子

良いと思う句をもう一度読みまともらず

我が好きに天地を付けて最終選

堺市 藤井 一二三

中米接近と日本政府

知らなんだしらなんだと二号浮気され

鞍馬貴船詣で

流音がなお静けさをます貴船

和泉市 西岡 洛 醉

一服の想いがほしい大都会

にっぽんの隅で遠慮のない暮し

西宮市 島 居 百 酒

無遠慮な言葉になって貸してくれ

鳥取、湯村温泉旅行

砂浜のたかが広さへバスつらね

八代市 永 松 道 雄

本心をさらけて今日の二日酔い

ハッピーエンド和服の恋がまといつき

八尾市 飯 田 一 治

やり玉にあげれば精神分裂症

青春の好奇スパークして汚れ

★

若本多久志

积路郎わが読誦を聞こしめし

休まれぬ社長の椅子は廻りずめ

三倍も働くことで社長なり

旧姓を承知で養子きてもらい

手放なさぬ欲まだ昇るまだ上る

北川 春 巢

ポーナスが出たらしくルマぶっ飛ばし

ぬるい風呂好きは遺伝をしておらず

ピンポン台隣りが買ったやかましき

着物着るコツを教えてメシが食え

電話切って嘘も方便だと思ひ

西 尾 梨

冷凍のちりめんじゃこの団結さ

ポインちゃんがないからあれは男だよ

まだ迷うたはりますのと女の眼

アナウンスどうも車掌は吃りらし

行水の孫追いかけるバスタオル

菊 沢 小 松 園

欠陥車と知らぬ同士で追いつ追われつ

心解け合うた無口を抱きしめる

針包む言葉を対手が悟らない

人妻と歩巾を合わす程に酔い

初めから欺すつもりでない涙

南御堂にて(一句)

「旅人」以後の

麻生路郎作品

— 11 —

三十四年五月号

不朽洞句帖

そんな男がいたのかと思う選挙汚職でも役目果した気でいてた受付をのぞむ男の元子爵

悪党の後裔をむしろ誇りとし

彼の話術にその妻も被害者の一人

文楽で一緒に首を振るも春

見おろして通用門の恋見つけ

必要に応じ男をとり換えた

謹厳そのものだと言われる人がパチンコ屋

岡田鹿の子氏が令息等の後を追うて学位を受く
てれることないさ医博の名刺出来

大阪通信病院句会「上座」

上座静肃別に居眠つても居らず

南海電鉄川柳会「ヘッドライト」

肩抱いて行くのへヘッドライト向け

三十四年六月号

不朽洞句帖

荷風の死 皆は貯金の方へ触れ

音痴などいてて楽しい夏の夜ル

何んという花かしらんと 応接間

タツタ一億円の寄附だが真似が出来ず

ダレスさん死ぬということを証明す

どんな意味だか山下清の額をかけ

南海電鉄川柳会「ワンマンカー」

天気晴朗ワンマンカーののろいこと

三十四年七月号

大阪通信病院鳥ヶ辻川柳会「秘め事」

秘め事は皆灰にして長生きす

杏林川柳会「騒音、下っ端」

騒音の中で旦那の小唄すみ

下っ端の酒ぐせ笑つてすまされず

南海電鉄川柳会「ターミナル」

ターミナル日蓮宗へ眼もくれず

(傍島静馬)

川傍柳 初篇研究

(九十八)

前田喜代人 川端柳風
 岡崎重義 高須唾三味
 清博美 丸十府
 藤井和雄 岡田甫

596 しゃば中が寝しづまったにうせぬ也

五雲

川端||吉原の情景句。ふられた客。皆もう寝静まったというのに、いまだに女郎が現われない客の心情。

高須||句全体が憎々しくいってあるところが面白いが、類句多し。

清||句意が諸説の通りでいいと思うが、下五字「うせぬ也」に疑問が残る。「うせぬ」には「来ない」「現われない」というような意味があるのだろうか。「うせぬ」は「失せる」の否定ではないのか。とすれば振られた客を詠んだ句としても、かなり意味が違ってくるように考えられる。すなわち、

待ちわびる耳へ蛙の声ばかり 傍115

という句があるように、吉原の周囲には田甫や古池があったので「失せぬ也」は蛙の声ということになる。この疑問先生にお願ひします。

藤井||清氏の疑問については、うすは失せる、なくなる、去るの外に来るの意の卑語と「広辞苑」にある。専門的な解はやはり先生にお願いします。

丸||替。「うせる」は「うす」の口語。居なくなる、去る、行、来る、居る、死ぬなどの意。現在でも「今頃までどこへ失せおった」などと使っている。ここ「うせぬ」は来ないの意で「ぬ」は打消しの助動詞。

岡田||諸説の通り。コトバというものは面白いもんで、逆に使用される場合がある。「けしからぬ」なども「けしくはない」のだからいい意味なのに、実際には悪い意味に使用されている。「うぬ」とか「おのれ」は自分の意味だが、相手を指して「お前は」の意味に使用する。句の「うせぬ」もそれと同例。

597 正とう寺中たつによふと土手でい、

秋紅

川端||正燈寺中を隅から隅まで尋ねてみようと土手でいっているのは明らかに

是からは奥の院だと正燈寺正燈寺何かは以て帰るべき

奥の院、つまり吉原にも行ってみようと衆議一決。

高須||最初からそのつもりで出た人数が紅葉見物中にはぐれたのと違うか。

前田||前説に替。はぐれたのは吉原行きをいい出した会計ゆえ、だから引きかえして寺中をたずねようといっているところ。

清||いづれの説にも賛成しかねる。正燈寺へ紅葉狩に行った者へ、何か用事が出来て、さがす用にせまられさがしに来た連中が話している言葉であると思う。正燈寺中を尋ねようという言葉の裏に「ご本人はすでに吉原にくり込んであるかも知れない」というニュアンスが感じられると思うが如何。

藤井||この句は、正燈寺から吉原へくり込

んだ一座の連中の土手での会話と思う「おい家へは何というて出た」「正燈寺へさ」「おめえの女房はオレンちとちがつて甘えから、それこそ今夜一晩、お前を正燈寺中たすねようぜ」と、かく會計係りより女房にした方が柳味があると思う。

丸丸清説贊。どうせこんな所にいる筈はないのだが、紅葉見といつて出かけたのだからともかく「正燈寺中を尋ねてみよう」といつているのだ。

岡田岡田諸説まちまちだが、結局この句は少し表現不十分だからであらう。みんなを巻いて吉原行を逃げる奴とちがい、必ず同行する（あるいは真つ先に吉原行を賛成する）男が見つからぬ。即ち高須説のハグレたとも解されるが「正燈寺じゅうを探して見よう」という表現からすると、みんながオンブする金持……という前田説が正しいと思う。それにハグレたら、今夜の吉原行はオジャンになるから。

598 むこい事衣の中で袖をふり

五 扇

川端川端「むごい事」ここでは可哀想なことだ。十九才の厄年で死んだ娘の振袖が、寺の天蓋となつてゐる「衣の中」は娘に先立たれた両親が寺で鈴をふると、天蓋になつてゐる娘の振袖を振つてゐるような表現だらう。

高須高須「然らん。「むごい事」は若死にした娘への言葉であらう。

前田前田既に出た

寺へ来て鈴をならして母は泣き傍一5と同想句。

むこい事らりやうの袖へ鈴をつけ二・21

藤井藤井賛。

天蓋屋気強くずつかく切り

法衣屋の嫁憎しいわねく

振袖を法衣の中で解きちらし一五・23

の例句により「衣の中で」は寺ではなく、法衣屋の仕事場に限定したい。

丸丸「袖を振り」の表現から、やはり寺と見たい。

岡田岡田同。

599 容顔を崩して解毒嫁はのみ

川端川端墮胎薬服用かと思つたが、嫁だから墮胎の必要はないから「山帰来」か。「山帰来」は蔓草の根を薬用として梅毒を治すのに用いられた。「好色一代女」に「おかし一 甫の悪病、山帰来などにして隠し置きし」とある。

まき添へにあって女房も山帰来四 39

山帰来女房ぶつ頂面でのみ明元庵2

おそらくこの嫁は亭主からうつされた病氣であらう。

高須高須「容顔を崩し」は謡の文句をとつたものであらう。それが顔に吹出物か何か出て、おどろいて解毒剤をのんでいる嫁さん

を詠んで適切?

前田前田「容顔を崩して」が面白い。類句に

頂いてのむもくやしき山帰来二・30があるが、主題句の方がすぐれている。

藤井藤井「梅毒はおそろしい。遂には顔も崩れてしもうと知つた花嫁さん、ちよつとした吹出物にあつて山帰来を呑んだ。しかし単に美人が苦い薬をのむ形容とみても面白い。美人が想像される。

丸丸賛。

岡田岡田「美しい容顔を崩して……」などとよく云うが「容顔を崩して」は女がニコニコ笑うこと。その意味から、恐ろしい墮胎薬とか、いまわしい梅毒の薬などは考えられない。新妻が笑いながら飲む解毒とは桃の酒であらう。「俳諧歳時記」に、桃の酒は「百病をのぞき顔色を直す」と書いて

いる。「これを飲むと、百病を除くほかに顔色が美しくなるそう、少しお前も飲んでごらん」と云われて、美しくなると聞けば若い女性は大喜び、ニコニコ笑つてなめて見る。そもそも若い嫁などが飲む酒と云えば、正月のトノと、雛祭の白酒ぐらい。それにこの桃の酒は雛祭の日だけに飲む。

若本多久志著

「親ごころ・子心」二八〇円 送料共

「老いの坂」五六〇円 送料共

ニクソン訪中のビックリニュースにわく七月十六日、そのかみ大陸で一つカマのめしを食った老漫画家佐久間晃から「想い出の満州」というのを贈られた。

このホンは、私の青春期をたっぷりと吸いとってふくれ上った、かつての日の満州の天地自然人間風物が活々と脈打っていた。まさに「あゝ満州」の詠嘆の一語につき、ページの中のある一つには懐旧の情きわまって涙さえ流す始末であった。

ニクソン訪中は、保守外交の雪どけどころ一大ナダレ現象であると新聞も書いている。だがこうした歴史的ビッグニュースの初手にあるのは、ホーム球技の象徴のようなあのだけないピンポン玉であったわけだ。

中国文字のピンポンは、兵兵と書く。つまり二つの兵隊の兵の字の、下のチヨンチヨンが片っぱずつない文字を用いるのである。ピンポン外交の勝利をマスコミが大きくうたい出した当時、私は自由諸国の兵隊と、共産圏諸国の兵隊とが、いずれもなし崩しに、斗う兵隊という戦争の象形を、一部ずつ消滅させていく兆(きざし)のように思えたことであつた。

むかし、北京の東安市場で、市民の若者の息抜き場として、ピンポンや四つ玉の遊戯場が二、三あっていずれもよくはやっていった。私も折をみてはそこに出かけ、北京の女子学生たちとピンポンに興じ、王府井の若い衆と四つ玉を斗わせたものである。奉天では、南市場にもピンポン戯場があつた。商埠地に住

満州走馬灯

東野大八

んでいたで、月給日には鮮婦の群がらる十間房へ、使い果たすと南市場のピンポン屋に outcome、その少姐とふざけあつたものだ。銅子児は懐かし酒を知つたころ (木耳)

というのれんが、私の書齋の入口にぶら下つている。木耳の上に藩陽の文字がついているのだが、この二文字は奉天のことである。銅子児(トンスル)とは銅銭のこと、今なら五円玉か十円玉なのだが、奉天の銅子児は四、五枚あれば計り売りのパイカルがりっぱにありついたのである。

金沢で開かれた大陸川柳同窓会の兼題は歓喜仏であつたが、私の投句したのは

御真影の如く糸ひく歓喜仏

というのがあつたが、塊人先生は没にしてしまわれた。そんなことはどうでもいいのだが私が大陸で、生れてはじめて歓喜仏なるものをシゲシゲと拝観したのは、何をかくそう奉天北陵の片ほとり、法輪寺のそれであつた。筋肉隆々たる怪異な風貌の男の木像に、彩色冠冠の艶かしい女神が後頭部を仰向けてし

がみついている。問題はその腰から下で、そこには色のあせた黄色い幕が腰巻き然とたれ下つている。金を出すと、薄汚い坊主が鹿爪らしく線香を立て、カネを鳴らし、いとおもむるに幕の後のヒモをひくのである。スルスルとそれが片方にたくし寄せられるや金色さ然たる女神のお尻がみえた。問題はその男神交合の秘処にあるわけだ。下からすかし見、キチヨめんな御仁は、傍らのハシゴをかりて近接してみるわけである。くそまじめな坊主と、ニタニタするリーベンレンの対象が、天地渡化のこの歓喜仏の御利益であつたわけだ。私は巨大な結合の細工ころの興味より、坊主の手の内幕がひらく藹々たる厳格さに、つい故郷の紀元節や天長節に、校長がひらく絹のカーテン下の天皇、皇后両陛下の御写真の露出シーンを想像したものである。いとソボクなる童心のヒレキに過ぎないと御寛恕願いたい。

本誌同人の中川晃男さんの郷愁切なるハルピンは、キタイスカヤが本命だ。

昭和十二年四月「大陸の琴」の取材にここを訪れた室生屋星は、つぎのように詠った。

喫茶店マルスの少女光りて

その大いなるしりうごき

日もすがらお茶を運べり

この人にしてはおそろしくヘタクソである。この点、与謝野晶子の方はまだマシだ。

ハルピンは帝政の世の夢のごと

白き花のみ咲く五月かな

まあ、平抜きだね、といたいところだが私はマルスのホステス一人をひっかけて、プーシンクン取りでいたら、国通記者のHが十何人かを全部まで切りにしていたにはカブツをぬいだ。今思えば、その略符からしてエツチだ。

「想い出の満州」には茫莫千里の忘失万里の私の脳裡から、幾つかの懐旧いと切なるものを次々とひき出してくれたのだが、酒徒の私に一しおうれしいのは、満州の日本酒で

水に生まれ

高鷲 亜鈍

水に生まれ水に死ぬ皿のない河童

水欲しい河童皿の気になつて

川柳を詩の次元にまで高めん

内臓を喰い散らしての禿鷹の群

ある。菊千代、志摩錦（大連）満州桜、鳳

凰、満州正宗（奉天）満州月桂冠（撫順）金

鶏稲鶴（安東）満州松竹梅（新京）鷹の羽

（公主嶺）金閣（図門）蘭菊（ハルビン）凱

歌、壮内江（壮内江）沢山あるなかで、私が

飲んだり、記憶にあるものだけを選び抜いた。

四平街の酒に白梅、長髪があつた。ここ

生れの直木賞をうけた豊田稷にその話をした

らいきなり握手して、そうそう、よう憶えと

つた、と大喜びしてくれた。何をかくそう、

この四平街の酒の直売所が、奉天の奉ビル前

にあつて、その看板娘にホレて、私は毎夜

かよい通したものである。なんで忘れてよい

ものか。また忘れられない酒に双葉山と兜正

宗というのが上海にあつた。どっちも紅茶み

たいな色をしていて、兜正宗ときたら銚子二

本で文字通り頭へくる宿酔の迷酒であつた。

満州ゆかりの人びとのところも面白い。

浅丘ルリ子、松島トモ子、波島進は奉天生

親のように詩で暮したいデルタ

物理学学生物学考古学的月の石

白銀色の月と見るだけ見えるだけ

出脛を朱唇にして喇叭の音色

手のとどこく花も美し月も美し

カラフルな花に埋まる死面

月に足地を頭上にして正和

宇宙からみたら汚点である地球

樹から離れた猿の尻にも光りあり

れ。三船敏郎は青島生れて大連中学卒。宝田

明、梅宮辰夫、明智十三郎はハルピン生れ。

万里昌代、せんぼんよしこは大連生れ。東海

林太郎は鞍山図書館員出身。藤川公成（通称

フジケン）は新京劇団出身。五味川純平は鞍

山昭和製綱所社員。水上勉は奉天の国際運輸

出身。島田一男、小田和男は満州日報記者。

キックボクシングの沢村忠も満州生れで、プ

ロ野球の水原茂も奉天の民間会社に勤め、毎

日一升酒をのんで、サラリーのほとんどは酒

代。森繁久弥、芦田伸介も新京放送局畑の出

である。日本が生んだ世界的名指揮者小沢征

爾は小沢開作の息子さん。小沢開作といえ

私は北京でよく顔を合わせた。梨本祐平の国

土気取りの上をいく人物で、新開路のお宅へ

取材でいったとき、チヨコチヨコ遊び回って

いたチビが小沢征爾だったのかもしれない。

ともあれ、想い出の満州は、最限もなく大

陸ムードを次々とひき出してくれる。こうい

う本をひろげていくと、大陸という過去の亡

霊を追うラチもない連中ときめつける東京の亡

さも心得たような川柳人に、一発、スゴク居

直りたくもなってくる。ごらん、ニクソン訪

中のミステリーに、早くも色めきたつ日本財

界の餓鬼どもの姿を……。満州（東北）を抱え

込む中国は、決して亡霊ではない。レキ然た

る世界情勢の帰すうをにぎるアジアの、一大

大國なのである。

陽は南ホトケは遠く向いたまま 木 耳

の句をいみじくも思いうかべる私である。

川柳は

「おこ」の

文学か

「おこ」とは、中国の後漢の代、烏潯（おこ）の国が在って、その人の言葉がわからず、滑稽であつたという説話から後に「おこ（痴）ばかげたこと等の意味に用いられるようになった。この語は、古事記中巻に「わが心しいやおこにして……」等と古くから我が国に移入されて使用されている。川柳は、笑ひ滑稽の文学の範疇に入れられているが、果してこれでよいのであろうか。

折口信夫博士は「川柳は狂句と悪態との合体したものだ。」（日本芸能史ノート）と云われているが、この面では、これが諷刺罵笑の文芸的形式として、狂句の時代と謂われる文化文政期に華咲いたものであつた。

狂句とは「たわむれ」の句の意味であり、中根淑（きよし）氏の説に拠ると「四世川柳が、狂歌より思ひ寄つて狂句と名付けたので、それ以前は前句と云う名を用いていた。が此の頃は、前句とは別体のもとなつていた上は、彼此紛わしくもあり、更に其の名なくてはとて名付けられた。」（明治三十五年「前句源流」）と謂われている。

狂句の句体についてみれば、それは遊戯的に文字の技巧を遊び、縁語や掛詞、さては同音異義や同音同語等による笑いや諷刺嘲罵が用いられ、駄洒落や地口の可笑味、警句や氣の利いた文句等が用いられている。

この狂句の普及隆盛が、いかに真の川柳の認識を誤らせしめたか、思い討るべきである。明治三十五、三十六年以後に、先師阪井久良岐氏に拠り「狂句百年の負債をかえせ」との旗標が掲げられて、次いで井上劍花坊氏岡田三面子氏、窪田而笑子氏等の新興川柳唱導と成り、諸家のこれが活動運動と成つて、現代川柳に及んでいる。

川柳を「広辞苑」に拠ると「川柳点の前句付から独立した十七字の短詩、俳句とはその趣を異にし、切字・季などの制約なく、多くは口語を用い、人情・風俗または人生の弱点を衝き、世態の欠陥を諷し、簡潔・滑稽・機知・諷刺・奇警が特色。狂句。」と誌されてある。そして、狂句を見ると「俳句の形をとつた、しゃれ・地口趣味のおどけた句。」とある。川柳が、狂句と謂われた時代は在つたが、現代の川柳はさに非ずである。川柳は、社会詩・人間詩・国民詩として現時は諷詠せられているのである。

先師に拠れば川柳の三要素として「おかしみ」「うがち」「かるみ」が唱導されている。その中「軽み」は高俗俚俗として、天明朝の与謝蕪村により斯く唱えられたが、これの語は松尾芭蕉翁の語録に見えるので、戦前に頼原退蔵博士に拠り発表され解明せられた

ものであり、阪井久良岐氏は、これを古川柳の裡に見出して唱えられた。現実の矛盾を超越する「高悟」から現実肯定の精神即ち「帰俗」に到着するところに真の川柳もまたその精神がありはしなからうか。ペスタロッチ研究の権威の故長田新博士は、わが学窓時代にあって、絶対矛盾の自己統一と説破されたが現代の川柳は、まず脚下観照もつて自己の鍛錬から発して一路向上の人間修道を通じ、日々是好日（「碧巖録」）の句作道を通じて、川柳は止揚（アウヘーベン）されるべきと思惟する。

川柳も言語表現である以上、日本伝統の「言霊思想」の含有影響せらるべきを忘却してはならない。本居宣長翁の名著「直隰霊」に

「そもく、此天地のあひだに、有りとする事は、ことごとく皆に神の御心なる中に」施行されるとあるに、深く合わせ考うべきである。

生かせるべきか、生かさされるべきか、これが思考をこらして流転の人生世裡に、誰れか川柳の新風を掲ぐるのであろうか。

注1 止揚あることを否定することによって、かえつてより高い段階へ進むことへ「ゲルが弁証法の用語として使つた（「土佐日記」の川柳味——を近く発表させていただきます。——編集部）

石崎柳石

天皇さまと

東郷さんとの

或る日の思ひ出

野迷路

福井 信立

(傘寿翁)

日本に四さんと云う人物がある。即ち死後もさんづけで呼ばぬと語呂のわるい人物が四人いるわけである。

曰く、太閤さん、西郷さん、乃木さん、東郷さんである。仮りに楠さん、織田さん、徳川さん、岩倉さん、伊藤さん、板倉さんと云つても誰のことかわからない。とにかく私のような末輩が明治の元勳東郷さんに身近かに接し得たのも元帥が米寿を全うされたからである。晩年主治医として仕えていた時「君はいくつだ」との質問に「ハイ四十四才でございます」と答えたら「フーンなんと若いもんじゃ、わしのちようど半分じゃのう」と云われたのが、私がまだ大佐の頃だった。

元帥の晩年の話は或る雑誌に掲載された。今日はこれとは別の、とっておきのエピソードとして今上陛下と東郷さんのことを書いてみる。

大正八年私がまだ二十八才の大尉で駆逐艦

の軍医長の頃だった。御承知のように明治大帝はお偉い方で人物を見抜く天才であつたらしい。当時の文武最高官はみな立派なお屋敷や別荘を持ってゐたが、東郷さんと乃木さんだけは最後まで質素な家に住んでいたことも、大帝はちゃんとご存じであつた。皇孫(今上天皇)のご教育は東郷さんに頼まれ、乃木さんには学習院長として華族の子弟教育を頼まれた。

大帝亡きあと大正時代にはいつて、裕仁皇太子(今上)に対し、東郷さんは東宮御学問所総裁を仰せつかった。当時は立皇太子と同時期に陸海軍大佐に任官する慣わしになつていたので。

大正八年八月下旬某日台風を前にして太平洋の波高き日に、東郷元帥から今朝ただいま皇太子と自分が貴船に乗つて横須賀軍港を出て太平洋上を航海するという火急の命令が出て船長以下をびっくり仰天させた。

当日は筆舌を絶する暴風で、私もこんなひどい目に遭つたことがない。港を出ると艦体は木の葉のように揺れひどいふな酔いに罹り、嘔吐はする足腰は立たず、艦の動揺に死ぬ思いで軍医長自室のベッドにしがみついて寝ていた。その時艦橋から艦長の声あり「軍医長すぐ来たれ」とのことであつた。私は「軍医長は目下病氣中なり行けぬ」と返事をした。次で又艦長から二度目の命令が来た。それは「皇太子大佐病氣につき直ぐ来れ」とのことであつた。これを聞いてびっくり、従兵に支えられて艦梯を上り艦橋に来て見れば、これはまた如何に、皇太子大佐は起立のまま顔面蒼白、ひどい嘔吐をしておられる。私はへなへなの体で殿下にどうぞ腰をおかけ下さいと何度頼んでも殿下をおろされぬ、私は殿下と相擁して、あっちへヒヨロヒヨロ、こっちへヒヨロヒヨロ、殿下の吐物をハンケチで受けるくらいが関の山だ。再び殿下に腰をおかけになるよう幾度お勧めしても頑としてお聞きにならぬ、そうこうするうちに看護長がコップ清水とタオルなど持つて来たのでお飲みせしたら、やつと吐気が減じた、勿論清水のお余りを私が夢中で飲んだ。

ブリッジでは艦長以下みな一生懸命暴風航海の海上を見つめていた。

その時ふと後ろを振り向いてびっくりした。そこには東郷元帥が厳然と立って私等の一挙一投足を見ておられる。陸軍と異う海軍では、皇太子とはいへ軍艦上では宮中府中の区別は確然と守られ、一介の大佐に過ぎない。大佐の身分が元帥が介して居るのに腰を下ろすことが出来ぬ理由が分つた。東郷さんの厳とした姿を眺めて自分の取り乱した行為がなんとも慙愧に堪えず、船よりもさめてしまった。

当時陛下は十八才、私は二十八才、東郷さんは七十二才であつた。明治大帝から皇孫の教育を頼むと云い残されたあとの東郷さんの教育とこんな苛烈なものだった。東宮御学問所総裁としての或る日の一コマである。

それから十六年目、即ち昭和十一年東郷さんの八十八才の晩年に奇しくも主治医として

親しく接し得たのである。至誠のかたまりのような偉い人物を表から裏から、ありのままを見せて頂いた私は幸運であった。

英国民がトラファルガル海戦の救国の英雄としてネルソン提督を慕うように、日本国民は日本海戦の救国の英雄として、東郷さんを身近かに感じる理由も判るのである。

四さんのうち太閤、西郷、乃木の三さんは皆非業の死を遂げたが、東郷さんだけは幸運の長寿を全うした。東郷さんの病中も今上陛下には、師父のように慕われ、御心痛さる度々侍徒や侍医を差しかわされた。国葬も実に盛大に行なわれ、各国の海軍儀仗兵の参列もあり、我国国葬の最たるものであった。本文は編集部の一三夫さんが、私の海軍現役時代のおもしろい挿話をゼヒ書いてほしいとの注文で、とりあえず一文を送ります。

(元 海軍軍医中將・医博)

料理と川柳

光武弦太郎

俳句に独特の味があるように、川柳にも各作者独特の味がなければならぬ。三太郎氏には三太郎氏の、路郎氏には路郎氏の、また紋太氏には紋太氏の、誰にも真似のできない特有の味があった。

ところが、この独特の味をつくりだすまで

がむつかしい。初めは誰でも自分の好みに合った師匠の味を苦心して模倣する。見様見真似でその味を自分のものにしてしようと努力する。しかしこれがなかなかうまくゆかぬ。誰でも一句や二句は傑作らしい句ができるが、後がつづかない。修業が足りぬといえばそれまでだが、いくら教えても、うまくならない人は生涯うまくならない。

人に、ものをちゃんと教えることのできる人は、だいたい、やかましく、気むずかしい人が多い。路郎氏がそうであった。しかも多少、傲慢に見える。それは作者が作句や指導に熱心のみならず、人に愛想をふりまいたり、人の長話を耳を傾けたりする余裕がないからである。一を聞いて十を知る一頭の切れる人ほどこの傾向がつよい。

お互ひの世にせうとしかどがたち 路郎
おしゃべりはきらいわが妻ならずとも 同
ということになりがちである。

いい料理人になるには、まず、一流の職人のいるところで働らき、その一番いいところを頂戴するのがコツだ。そして鍋洗い、出前持ち、魚の水洗いなどを一、二年させられ、やっと魚をおろさして貰い、ついで煮方、包丁と修業するのに十年かかるそうである。

つぎに、料理人としての心得は、第一にいい材料を、自分で仕入れにゆくことだといふ。また、味つけが一番むずかしいが、これは教えられて上達するものではない。修業時代に人のやることをちゃんと見ていて自分の

ものにするのが第一の要件である。しかも材料はなるべくいいかして作る。つまり、あまり手をかけずにたべるように作るのがコツだそうである。

とすると、川柳の味づくりも、料理の味づくりにそっくりだと云えないだろうか？

第一に、一流の師匠につく。第二に、うまざつたゆまず、人の秀句を勉強する。第三に、材料の味つけは必ず自分で仕入れる。第四に独特の味つけは詠法を自分でつくりだす。この四つの方法を、生涯実行してゆけば、きっと一流の柳人になれるのではなからうか。

草の根よ僕も鬨ふ草の根よ

——(巻岐)ふあうすと社同人—— 路郎

柳翁の一面(続)

吉田水車

本誌五二八号で発表していただいた、拙稿「柳翁の一面」の続として誌中を汚し得るなら幸甚である。

今井卯木著「川柳江戸砂子」下巻、浅草の章で初代川柳に關した一挿話の紹介をされてゐる。それはやはり「天人は小田原町を覗いて居」の句についてである。ここでは「句の意義が通ぜぬので百方苦心の末遂に観世音へ祈願をこめて日参し、たまたま天井の天人を

仰ぎ見て、また提燈へ目を移すに及んで、初めて句意を解した云々」とある。この解釈の批評では「何等趣味も詩味もない、見たままの句が詠れたのである。此句に就ては初代川柳翁に關しひいきの引倒しのような、ほめたのかけなしたのか判らぬ挿話が伝わっている。観世音に祈願してまで句意を解するに努めた行為の礼賛はいが単なる奇知的ねらいに過ぎないものを高点に選んだというに至っては余りに翁の鑑識を侮蔑したように思われる。此挿話は多少形を変えて伝わっているから、

敬すべき翁の爲に弁明して置く」とも書かれている。この形を、変えたのが既稿のように、川柳自身が浅草に行ったのでははなく、その妻女が参詣しての話から句意のヒントを得たことになっているようである。何れにしても翁を慕つての一つの挿話ではあるが説話的伝承でいろいろにかたがたが交つて行くのに興味深いものがある。

因に、日本名著全集の川柳雑俳集、表紙に右の句と提燈が金刷りでえがかれている。

桜川不水逝く

昭和四十六年七月七日逝去

国弘半休門

冷えてゆく手をしっかりとサヨナラ

昭和四十六年七月七日、齡七十三才、病名肺癆、俗名北坂一夫、号桜川不水は頭初の句を最後に下関市中央病院觀察室で二度目の養生相かなわず幽閉境を異にした。「冷えてゆく」の句は逝去三日前、日々衰弱して冷たい手を富佐子夫人に差出し「苦勞をかけてすまない」と、しつかり握って詠んだものを、夫人がノートしていたのを拝見したもので自らペンを持つ力もなく辞世の句となったのである。戦前釜関連絡船金剛丸の無線局長だった氏は終戦後も金剛丸と運命を共にし、引揚者輸送の任に就き昭和二十五年大任を終えて退職したが乞われて再び海上生活に入り、昭和三十

十六年海上生活に休止符を打った。家族は二男一女、長男は佐賀、有田工業高校教員、二男は下関市大洋漁業に奉職、長女は山口市に嫁す。外孫四名、富佐子夫人とは十五年前結婚した由で、退職してからは下の自宅に夫人と二人つきり、昭和四十五年十二月入院して明くる三月に一度小康をえて自宅療養、五月再検診のため同病院觀察室に入り七月七日絶命した。末尾掲載の句は病床作二十数句の内から筆者が選んだもので、氏を語るには当らない向きもあると思ったが人間不水が死を意識しながら、自らペンを取って記録した貴重な人生観と思われるので、お許し下さい。氏は熊本県に生れ質実剛健、酒を愛好して

いたが柳友肝膽相照す機会少なく、地方句会に顔を見せないし、色紙、短冊に句を揮毫しない。併し路郎師に師事し、不朽洞会入りしてからは、万障繰合せて、路郎師と会うよう努めたようである。

だいたいふとれ河豚の子も肥れの句は、路郎師特選の句で酒豪不水の風格を偲ぶに足る。筆者とは昨春浜田久米雄氏来関の節お会いしてから会っていない。遺族の方々には老衰と伝えていられたが再検診のため入院してからは本人も不治の病床と自覚し、余命消光のあかりを求めていたものと思われる。

終始ベッドに付添い看病に余念なかった富佐子夫人の今後の生活について、未だ確報は得ていないがおそらく自宅にあって、黒棒の大乗院真誉覚道居士と起居を共にされるものと思われる。

宗……浄土宗 寺……熊本市来向院

(註) 文中觀察室とは筆者の当字につき正誤を乞う

病床作句の中から

体温器寝たまま臍へひつかり
ドン、ビシャッ今日はドアの厄日なり
注射ズバリ!!看護婦にもある個性

「オーイオーイ」としゃべからの声が聞える
老婆の深まる白髪へ目が外れる
七十三才にして知る苦むす妻の愛
不水君じゃないかと路郎師肩叩き

パスポートなし三途を追い出され
死灰また燃えんとど思う七十三
起きて倦き寝て尚ほ苦し長い床

同人吟

秀句鑑賞

—前月号から—

若本多久志

冷凍魚不動の姿勢で値切られる

本田 恵二郎

「川柳の一茶」とさえいわれた、亡き豆秋氏の句を思い起す。次元の高いユーモラスを感じさせる。中七、下五がよく利いている点、さすがベテランの句と賞賛。

また事故かそうかとほそり言うただけ

浜田 久米雄

句主が、永い国鉄生活の中で度々このような言葉を耳にされ、そこに人間としての怒りと、どうしようもない人間の宿業というようなものへの哀嘆が感じられる。

ポツリポツリポツリ雷にいそがされ

河村 日満

本ぶりに成って出て行く雨やどりという有名な古句があるが、この写実性に於て、優るとも劣らない現代版の句である。

しきたりに古い女でよいとする

小出 智子

「柳歴」なんていうものが、如何にむなしいかということをも、常に句主に感じる。捕え所の鋭さ、大胆な表現、共にベテラン級の作品といえよう。

気懸りなとこで止った聴診器

有信 新之助

もしや？と不安な気持ちで受診した。患者の心理状態を、聴診器の止ったところでピークにした手法に感嘆。

王朝を偲ばず光茫塔に浮く

松川 杜的

俳句では詠めないこうした客観句の中に、人間の歴史を感じる時、我々はいつとも、川柳の道に進んで来た喜びを覚える。

長男も嫁の実家へ近く住み

宮尾 あいき

親というものは、枯葉が淋しく樹から散ってゆくような思いで、若木の成長を念すべきだと我々は教えられた。然し、母親としての宿業がそこにある——その心境がよく詠まれていると思う。

妻 妻と書いて退院待ち続け

堀江 正朗

奇くも私は七月号近作柳樽の秀句鑑賞に、

句主の奥さんの句を挙げている。(秀句の選

は清記無記名、選評は作句者記後) この句が妻への切々たる愛情を吐露している所以も、前記の句にあることを思い、お二人の夫婦愛に限りなき羨望を感じる。

曼珠沙華真赤に燃えて誰を待つ

宮西 弥生

たかぶり、燃える女心を、深紅の花にたとえて詠んでおられるところに感銘。

質屋へも通わせた肩揉んでやり

出原 敬一

銀婚も過ぎた頃の夫婦愛。中は道楽を極めての罪ほろぼしもあるだろうが、妻を大切にしだす齡ごろの一風景ではほえましい。

酒だけを生き甲斐とした愚を悟り

飛田 好一

酒 酒 酒素直に酔える妻の酌

志賀 木石

人生と酒—人間が生きてゆく道に酒との宿命が、如何に多岐、多様であるかを考えさせ二句である。

白柳さんは

この句集の

なかで今も

生きている

遺句集

近作柳樽

秀句鑑賞

—前月号から—

浜田久米雄

笑つては見たが妬心かくされず

河野 幸子

妬心は嫉妬(しつと)の心と取った。みな女扁である。この心は男にもあるが女の方が多から女扁になったのかもしれぬ。その場は笑つてすまそうとしたものうつつな笑いになってしまつて嫉妬の気は消え失せない。笑つては見たがにんのあわれさがある。

はねたのもはねられたのも酔うており

両川 洋々

飲酒運転絶滅と叫ばれつづけて来ているが影を潜めぬ現代の交通事故だ。この句はどちらも飲んでいたのだからよほど念が入っている。これでは飲んだら乗るなど飲んだら歩くなど二つの警句を出さなければなるまい。皮肉たつぷりの句。

コンピューターが縁で並んだ指定席

ふきあげ 虎城

袖摺り合うも他生の縁と言われているが、これはコンピューターが選んだ近代的な縁である。この指定席が若い男女であればなにかが生まれそうであるが、苦虫をつぶしたような男同士、つんとすました女同士が並んだとすると色気がなくなる。コンピューターの縁も所詮他生の縁のなかに入るのである。

今握手した手でそろばんはじいてる

荒木 鶴翠

握手は親しい間柄もあるが儀礼的な場合もあり、この句は後者の方である。そろばんはほんとうのそろばんではなく胸算用である。打ち解けたように見えても人間欲のかたまりである以上そう簡単に対話できるものではない。心の底を突いた鋭い句である。

尼寺の花気がねなく赤く咲き

榎村 ふみよ

世を捨てた尼さんばかりいる寺であるから尼寺にふさわしい白色などの花が咲けばと思うのに真赤な色の花が咲き誇っている矛盾がこの句のいのちである。尼さんに気がねせぬ赤い花ではあるが尼さん達は別にそこまで考えず花は赤いものときめているかもしれない。川柳人が見たこまかい見つけどころだ。

さっそうと歩くバッグ開いていた

生信 笑子

バッグの次に「はか」が入れて見た。これは男持ちの時も女持ちの場合もある。さっ

清水白柳

句集を手にして

白柳さんに

話かけて

ください

さびしがって

いるとおもう

定価六百元

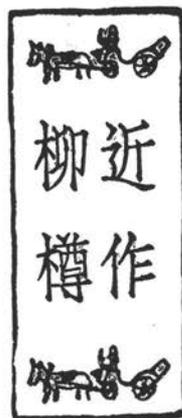
送料百円

そうと歩く気持の裏には多少のあせり、いらが潜んでいるのでつい口を開けたままのバッグを提げているのに気がつかぬことがある。何かの拍子にこれに気がついて口を閉めるのである。バッグにユーモアが溢れている。

素直さがなくて盆栽喜ばれ

松高 秀峰

植物の性質はまっ直ぐに伸びるのであるが殊更針金を使ったりして曲がりくねった盆栽が素人にははめられるものである。私が聞いた話では痛みつけられた盆栽よりまっ直ぐに伸びた直幹、見上げるような大木の相を鉢に移した盆栽の方が玄人には喜ばれるそうである。けれどもこの句のような盆栽を多くの人には立派なものとはめるのが通例になっているからいたし方あるまい。



川村好郎選

松山市 谷 のぶ お

この釘は去年も風鈴吊った釘

紫陽花はピンク支払いよい玄關

お人よし沈黙という手を忘れ

ゴキブリを叩く親しき客の前

富田林市 木村 弥栄子

棘のある花にも愛は惜みなく

誰がための労力か むなししい夜の底

何かある仮面の上に厚化粧

うづくまる郷愁古き良き時代

今治市 渡辺 南 奉

灯をつけてこんな広い妻の留守

片思い一人きれいな恋に酔い

値上りの中で夫婦は無策なり

横文字に弱い女の化粧品

岡山県 嘉数 千代 香

善人のふところで小銭のやすらぎ

夢のかけらつなぎ合わせている孤独

悔い一つ拭えず白い花に佇つ

敗北を沈めこころの悔が荒れ

島根県 錦 織 文子

泥海の渦嘘のような空の碧

無に還る柩へ涙の香をたき

寿命ですなどと人間勝手すぎ

人間の死へ自問自答して

島根県 榊 原 秀子

ケロケロと蛙 蛙で思うこと

許された涙はぬくい瞳に出あい

レモンスカッシュに似た恋でした空青し

空白の欲しさが草をむしらせる

鳥取市 山形 春海

茶柱を信じ妥協の腹を決め

妻と子の意見も入れて明日を組む
夢一つ実り乾杯妻とする
母さんの助言心に灯がともり

大阪市 阪上十止庵

信じますただけだと女こころひく

子宝と素直になれず三女あり

盲点にふれ評論家らしくなり

ふるさとは土ふみしめるだけでよし

姫路市 大原葉香

無造作に布切り縫って服が出来

数鉢がせめて土の香団地族

土のない暮らしの人の冷たさよ

思い切りぶってほし懊悩の身を

大洲市 堀内暁風

大吉の易へ先方から破談

褒められるたびに盆栽減って行き

顔色を読んでその先き云いどよみ

長命の相も金には恵まれず

松江市 藤喜夫

正論に勝って後味悪くなり

明日逢える人あり湖上夕焼ける

点滅のネオンへ遠く妻と僕

商才はなし根性の小商い

大阪市 大住文子

ひたすらに未来に飛ばす鶴を折る

言葉だけゆき届きたる席に居る
風鈴がまばたく星の声伝う
ふるさとの柱に残る祖父母訪う

島根県 堀江芳子

命再びわが家の畳しかと踏む

病み伏して自己を見つめる日の長き

主婦代り長女いとしい汗をかき

病むひさし指輪くるりと向きを変え

大阪市 黒田真砂

満ち足りた食後へ友の計報くる

愛の波紋起しただけで去った人

ディオールの靴下穿いても同じ足

妬く事も忘れてバーの話聞く

鳥取県 林露杖

ガーベラの真紅も淋しさ誘うのみ

鳳仙花散りて無人の駅暮れる

床上げの妻と二人の天の川

アルバムを閉じて臉に影を追う

青森県 岩淵一星

三度目の転動生きた荷が重く

雑草に背くらべさせて田は眠り

セールスは花嫁のよに茶を啜り

また山を削り公害つれて来る

大阪市 河原林比呂路

土地ブーム薬ぶき屋根も色瓦

退社ベル主婦の顔をとり戻し
哺乳瓶いつか断絶の子に育て
サロンパス匂わせ女よく稼ぎ

島根県 谷 岡 芳 枝

ガムシヤラに泳いで来た道ふり返り
失敗談もませて我が子にさとらせる
手を抜けばやっぱり小さい花が咲き
かけ出しの悲しさ重く雲を見る

島根県 榎 み どり

思いきり手を振り母の影を追う
久々の墓前線香たくあげ
むきになる娘の討論の頼もしく
我が家にも断絶のうず近よりぬ

大阪市 小 谷 葉 子

キャンバスに春愁ゆらぐ京の女
一カット終えてシーンを持ち歩く
地の果ての小さいちさい塔きずく

蘇洞門めぐり

岩景に心はひとつ遊覧船

竹原市 三 宅 不 朽

忘れたきことのみおもう走馬燈
愛ここに極まるごとしカンナの朱
失ないし彩を見つめいし美展

大阪市 柳 原 静 香

知った顔捜すふるさとの歌まつり

嬉しきものよ百円の百合が咲く
苦しき日日夫婦のきずな強くする

香川県 西 山 綾 子

孫連れて旅のムードと程遠く
屋敷中草茂らせて旅終る
日空機冥土の旅は頼まざり

鳥取市 有 田 鹿 子

梅雨明けを病夫と共に待ちわびる
低血へ海水浴は見てるだけ
魅せられた若さへ我が身の老を知る

島根県 志 賀 美 栄

減反は蜜蜂にまで気を揉ませ
はげませば友の涙がせきを切り
慟哭の肩に微力の手が迷う

羽曳野市 大 峠 可 動

老兵へもう夕日が待ち伏せる
農を捨て生きるひとりのプログラム
透きとおる水にこころを嚇かされ

小松市 村 井 城 南

酒癖が悪いと知らず席を取り
建売りの何処にも母の居場所ない
年寄りの怒り連れ込み宿が増え

和歌山県 熊 野 溪 水

別れてもしつこい恋の後遺症
犯人に味方したいようなドラマ

夏休み親の学力ためされる

長野県 今井岳太

帰郷して(一句)

たしかめてから再会の声となり

ふたりならやまずに欲しいにわか雨

年甲斐もなく心ときめくひとに会い

米子市 増田竹馬

蚊の宿命人間に立ち向い

背泳ぎの足の先なる飛行雲

顔色を読まれ追打ちかけられる

米子市 石垣花子

全快の日の夢に耐え試歩の汗

太陽へいどむが如く杉木立ち

やりくりは見せぬ老舗の店構え

鳥取県 両川洋々

佐渡にて

船足ののろさ訃報を握りしめ

島影が見えて船酔いもうなおり

無心言う時の涙は別に持ち

羽咋市 三宅ろ亭

インフレへ小さな鍬を振っており

わが汗の滲んだ帽子棄て切れず

ひまわりは主体性なく陽を求め

島根県 東原福子

ががんばに童心戻る夏の宵

紫陽花の雨にいどみし七変化

こぼれ種小さく咲いて持つ気魄

東大阪市

会社では才女家ではあまい母

ひねくれもしますあの娘も三十すぎ

控え目に生活して近所から好かれ

尼崎市 中谷利美

自分ならアラマアで済むママのミス

老婆の知ったか振りが的はずれ

他人のアラせせて食べる評論家

兵庫県 高橋近江

手術中心経読んでた喉の奥

試歩の朝わが体重に泣かされる

手術後は捉えた虫けら放ちやり

愛媛県 小笠原仲美

思案まだつかず霧笛が遠く鳴る

解らない人と先方でも思い

いばりたい人のさかになにされちまい

守口市 野呂杜月

衰えを知って焦立つ淋しさよ

拌む気になろうと心に言い聞かせ

我が邪心縛るつもり珠数を買

藤井寺市 古結百水

阿部柳太氏令息急逝を悼み(一句)

嘘々と嘘と思いたい急死

産院へサイレンめでたさ運ばされ
人造の涼しさ昼寝の夢にいる

大阪市 西 本 保 夫

ガクの無い不運笑顔でカバーする
わたしには過ぎた妻です平社員
屑籠へ不満も捨てた平社員

和歌山市 樫 村 ふ み よ

土の手のまま朝顔の苗もらい
パパと子の足跡たどる潮干狩
後味の悪い言葉を置いて来る

島根県 安 達 潮 音

裏切られ涙で許すも母なれば
思案するほど魚もろうた浜日和
余命いくばくこんな話題の出る集い

樫原市 岩 井 本 蔭 棒

父母の亡い土間音もなく風抜ける
宇宙から見れば哀れな僕の欲
税金を引いた残りの退職金

氷見市 関 美 子

寒漁村夏カラフルに押し寄せる
流行を追ってカナリヤ程に食べ
母としてひらりかわした恋しぶき

仙台市 川 村 映 輝

無職にも馴れて退屈しなくなり
思いがけぬ夢今宵いま一度

藪医者が卒先保険医辞退する

今治市 大 本 バ ッ ト

花嫁を折って押し込む中型車
ご近所に女房孝行が居て採める
退職をして朝寝だけ遠慮せず

今治市 真 山 国 彦

御神燈の下で勿体なくも逢い
娘聾こまめに動くのが取り柄
宣伝のタダの化粧で逢いに行き

今治市 今 井 松 花

恐いもの無しと野心捨ててから
美容院嗤い泳いで逆らわず
遊学は過保護の糸の切れた風

今治市 古 野 伶 人

付き添いの方が見合いは草臥れる
空想の世界に陥ちてガラス拭く
ハネムーン婦随の躰して戻り

今治市 原 田 輝 親

晩飯の量を減らした雨読の日
行商の国の訛りで買わされる
野良猫の目には理解のある家主

鳥取市 藤 本 和 宏

草木の育ち季節に逆らわず
住宅難うらやましいぞカタツムリ
ライブルへ助言する程あるゆとり

鳥取市 藤 本 佳 女
また一人癌に取られた句の仲間
ふる里の川へひざまでつけて見る
夫逝けど孝行しそうな子に育ち

鳥取市 藤 本 鎮 也
鈍才に育ち家業へ精を出し
制服でいま離郷する発車ベル
ぶしつけな視線に馴れた水着の娘

鳥取市 藤 本 恵 子
台所の隅でねずみの子が育ち
何気なく見てたテレビで得たヒント
衣更え母があわてる育ちよう

和歌山市 垂 井 千 寿 子
笑い顔せずも大きいパパの愛
競走もここまでとして嫁に行く
下手だから走り書きだと書いておく

和歌山市 ふ き あ げ 虎 城
失言としての弱さを未だ見せず
ひと言が言えずパレットの嘘を交ぜ
償いを見せる女に増す妬心

新潟県 高 野 不 二
釣り好きの食わせる餌は惜しからず
半分は居眠り相手にするガイド
呉 市 楨 田 英 詩

万年も何処で生きよう亀の愚痴

金屏風両家を結ぶ祝い唄
新宮市 小 山 峻

守銭奴でないがソロバン固く持ち
釣り堀のハマチに見惚れ釣りそこね
岡山市 山 田 止 水

働らけば子供が叱る余生なり
振り返るいつかの女に似た香り
堺市 栗 本 藤 持

放し飼いと知らぬ鯉の逃げっ振り
舗装道墓の前まで覗き込み
泉佐野市 大 工 静 子

そよ風に嫁かぬ心が誘われて
ひねくれを似ないでほしい芋を植え
大阪市 堀 口 欣 一

歩道橋お里沢市に似た夫婦
還暦のすんだのもいる花四天
備前市 武 内 雅 堂

限りなき愛ひとすじの飛行雲
蒼い蒼い海へ女をさらけだす
寝屋川市 福 富 隆 子

初産へ用意して待つ電話ベル
安産のあとに肩こり手の痛み
河内長野市 井 上 喜 醉

守口市 岸 本 豊 平 次

女の友情配偶者で変り

別居したつもりが孫をつけられた

河内長野市 森 本 黒 天 子

無精ひげ気になる年齢ではないものを

甘えて居るのかわからぬままの肩をもみ

七尾市 松 高 秀 峰

努力より頭ですよとあしらわれ

窮すれば通ずる程の暮しむき

守口市 樋 口 一 峯

紹羽織の似合う句がほし峯仰ぐ

その塔の石の一つにあやからん

大阪市 岡 本 ま さ ひ ろ

路郎師七回忌法要に参列して

おがむ人拜まれる人いま七年

探せばまだ何処かに仁義礼智信

高槻市 山 田 ス ミ 子

横這いの蟹には蟹の生きる道

ヘアピンを口に今日のプラン立て

鳥取県 福 田 陽 山

センターの鷺の湯楽しく若返り

さんざめく歌に艶あり老の宴

高知市 竹 崎 寛

とんがったころはもたぬ山羊の角

美しいでしょうと孔雀のよい構え

島根県 安 達 小 茶 坊

病棟の窓一線の飛行雲

野の花に老の弱気を取り止める

竹原市 生 信 笑 子

なつメロへ母のハミングうれしそ

逆らえば竹はビシリとはねかえり

今治市 蔦 本 昌 道

無一文のバック狙うてくる示談

冷戦へ和解の鍵がある今宵

羽曳野市 麻 野 幽 立

シャボン玉七色に冴え梅雨明け

逆もまたよし炎暑へ茶を啜る

松江市 村 松 醉 歩

美しい波の素顔よ月まるし

日々貧し一刀彫に髪乱る

東京都 古 川 良 光

初子誕生して

初子誕生の朝酒の味

初子誕生話したい誰にでも

東京都 宮 崎 美 津 子

譲り合う座席やっぱり坐りたい

病んでから初めて嫁の暖かさ

和歌山市 増 田 め ぐ み

白百合の香に安らいでいる私

乱れてる心水面の深みどり

杭全神社祭(一句)

大阪市 藤 田 頂 留 子
移り行く祭礼古老もの足りず
消えて行くローソクに見る人生観

鳥取市 近 藤 秋 星

未亡人織姫よりもなお哀れ

君逝って理想の夫婦一つ欠け

松原市 玉 置 迷 朗

ほっとかれるかも知れぬ吾が子に身を削る

はら割ったばかりに煮え湯飲まされる

愛媛県 小 山 悠 泉

うちの子へ冷汗が出る参観日

個性つらぬいて職人めぐまれず

松原市 守 屋 万 竿

梅雨晴間干せるだけ干そうわが心

梅雨晴間空はやっぱり青と知り

笠岡市 山 本 柏 生

予報より神経痛が早く知り

リュウマチス同士が誘うて来た句会

新宮市 川 上 久 司

保育所のブランコ揺れる雨あがり

無免許で恋を運転する若さ

京都府 矢 野 晴 光

年の功笑い声まで味があり

散髪代値上り遠慮なく伸び

大阪市 長 田 塗 杖
屋上の試歩エレベーターにたすけられ
両脇のベッドにすまぬ退院日

鳥取市 佐 々 木 静 泉

緑香に酔える幸わせ噛みしめる

清水を引き伝来の田を守る

大阪市 塩 満 敏

信濃そばガメつく食べる発車前

真打ちが最後の議席しめくくり

鳥根県 中 島 英 子

しば漬の土産に浮かぶ京の顔

輸血した腕とは知らぬ蚊に吸われ

今治市 伊 藤 一 郎

膳を見て今日ピーマンの安値知る

非常口しつこく聞いて嫌われる

愛媛県 渡 辺 都 留 逸

大阪弁でじわりじわりと断られ

どう売り込んでも端役老け役三枚目

新宮市 大 矢 富 子

良い話らしい大きな父の声

素うどの立喰いマナー無用です

大東市 荒 木 鶴 翠

親のものの子のものにして親を見ず

宿毛市 山 本 窓 花

背信をそしらぬふりで受けとめる

松江市 興 富 喜 子

川柳五十三次 (一一)

富士野鞍馬

21 岡部

岡部は鞆子から二里(七・九キロ)途中に名高い宇津谷峠がある。その旧道を「蕨の細道」といって、「伊勢物語」に書かれてある。

駿河なる宇津の山辺のうつつにも

夢にも人にあはぬなりけり

と業平が詠んでいるように、蕨紅葉が茂った細い道であった。明治九年に、百五十間(二七〇メートル)の隧道を通して、交通の人を便利にしたのであったが、それも今は廢道になつてゐる。

夫婦してあたる炬燵のうつつの山

(武二七二三)

めでたきは三度越行うつつの山 (〃一四三〇)
朝飯が茶漬に成とうつつの山 (武一四二六)

戻りには合点して行うつつの山 (〃一三三五)
馬叱る声を寝て聞く宇津の山 (〃一七一)
宇津の山捨てたいような檜にあい

(〃初二七)

などと「武玉川」に詠まれ、難所であったことがわかる。黙阿弥は「蕨紅葉宇津谷峠」を書いて、俗にいう「文弥殺し」の物すごい芝居になつてゐる。また十返舎一九は、

降りしきる雨やあられの十団子

ころげて腰をうつつの山道

と戯作している。

挽臼の休む隙なきうつつの山 (武一八三一)

欲のない土産物也うつつの山 (〃九二〇)

は、この名物「十団子」を詠んだもので、天文の頃(一五三二―一五五)連歌師宗長が、丸子の柴屋寺へ招かれて来た時の紀行文を見ると、

「宇津の山に雨やどり、此茶屋むかしよりの名物十だんごという一杓子に十づつかならず女らうなどにすぐわせ興じて……」とあり、そのころは食べさせたものと思われる。「風俗文選大註解」に、この十団子を旅人が食べている絵があり、その団子は普通の大きさと推定出来る。

十団子も小粒になりぬあきの月 (許六) 元禄二年(一六八九)には、この団子も小さくなっていったようである。

正徳六年(一七一六)の「婦家日記」に、「坂下るほどに十団子というものを家々の軒のつまにかけならべて売る也。しときの小さき丸を十づつ糸につらぬけるは、玉をつづりたらんようなり。旅人買いても行きでわらべにとらするとぞ。はかなげなるものから早くよりすることに、今に交らぬさまなるもあわれ也。」

とあり、また「東海道名所記」には、「坂の上り口に茅屋五十あり、家毎に十団子を売る。その大きき赤小豆ばかりにして、麻の緒につなぎ、いにしへは十粒を一連ねしける故に十団子といふならし。」と書かれ、別の本には、

「黄白赤等の小団子を十宛つないで売る」とあり、色をつけたのもあったらしい。 団子からぬい習わせる宇津の山(給一〇三)

宇津の山団子をぬって口を過 山椒(五四) 宇津の谷の娘団子で縫習ひ 三土(七二) 糸でつないであるので、

十団子ながめにならず食えもせず

寛朝(二七三)

十団子買って旅僧耳へかけ 三朝(七七三)

十団子くつわ屋珠数の白いやつ

杜蝶(七八五)

珠数玉か何んそと問えば十団子

佃(一三五〇)

五月雨の行李にかびてる十団子

喜柳(一三四三)

と珠数のようで食べものにもならなかった。

宇津の谷は喰れぬ物に銭の音 (武三三)

草臥れたあしにも豆の十団子 (芝丸)

この峠を下ったところが岡部である。

広重の絵には、山坂道と茶店の看板に「名物十ヲだんご」とある。

22 藤 枝

藤枝の宿は、岡部から一里二十九町(七一キロ) 広重の絵には問屋場風景が描かれてある。一九の「膝栗毛」にも話題はなく、宿を過ぎて瀬戸川を歩行渡りしたこのたて場

に、染飯(そめい)といつて、強飯を山櫃子(くちなし)で染め、それをつぶして小判形に薄くかわかしたものが名物になっていた。これも岡部の十団子同様食べるには硬いものであったようである。

染飯の見世に色気のない婆々ア
という川柳がある。

大井川が川留になると、島田がこむので、ここで足をとめる旅客も多かったようである。それで本陣二軒と十七軒の旅籠屋があった。

第23回 西日本川柳大会

とき 9月12日(日) 午前8時

ところ 岡山県久米郡久米南町下弓削、弓削

小学校講堂(津山線弓削駅下車)

兼題 エプロン・欺く・好評・急所・迎える・シルエット(各2句)

選者 中島生々庵(大阪) 大森風来子(岡

山) 田中好啓(岡山) 坂根寛哉(京

都) 桑原伸吉(京都) 直原七面山(

弓削)

会費 出席者五百円(昼食・発表誌)

投句のみは二百円(発表誌号) 欠席

投句は9月5日までに。

〒七〇九・三六 岡山県久米南町下弓削、弓

削川柳社宛。 タテ20Cヨコ4C句箋使用。

▼平野青夜氏(札幌同人)が主宰する「にっ

ほん川柳」第四号が出た。定価二五〇円、発

行所札幌市北三条西二丁目、日本川柳社。

▼水府百句が岸本吟一編で発行、非売品だが

父の句を子が選句する愛情がにじむ好著。

▼石原青童刀氏(東京都)は九月一日から左

記へ移られる。〒一五八 東京都世田谷区瀬

田二一九一九。

▼芸術文化七月号に、(顧問に今東光氏、編

集局長は猪飼叔蔵氏)川柳塔から左の作品が

載った。一中島生々庵選。

物干しも春色うごくものを出し 正本水客

隙間風白刃と同じはばで来る 西森花村

草の芽が出たぞおしっこさせながら

橘高薫風

男みな阿呆に見えて売れ残り 山川阿茶

「人間はいいな」天皇孫を抱き 不二田一三夫

同誌八月号には、若本多久志、川村好郎、

西尾菜、高橋操子、西出一栄諸氏の作品とボ

クのが出た。(ボクの場合は同誌からの注文

である)。

なお七月号には「番傘」と「平安」も参加

した。川柳ざらいの今東光氏が川柳にスベ

スをさいいたのは大英断だ。発行所大阪市阿

倍野区丸山通二丁目四一九、総合芸術協会。

(一部送料共一五〇円)

(F)



左から福永清造・橋本言也・近江砂人・堀口堯人・後ろ向き大井正夫諸氏。(カメラ・新之助)

麻生路郎七回忌川柳大会

(前号未発表分)

一 芳志御礼 一番傘川柳本社、ふあうすと川柳社、川柳文学社、福田丁路、小川恒明、高橋操子、中川滋雀、隠岐不酔、高原盛男、市川鱈魚、今西章雅、林野甍光、仲どんたく、吉結百水、樫村ふみよ、岩本雀踊子、弘津柳慶、増田次章(敬称略、順不同)

麻生路郎七回忌川柳大会兼題入選句の発表のおくれたことをおわびいたします。

兼題「路」

三条東洋樹選

大臣が テープを 切った路で 事故 弘 朗
紀州路の海は とくに 夏の色 紅 月
言訳の 理路整然が 氣に 召さず 英 詩

どこやらで 愛の路線が 食い違い 一 三 夫
過疎地帯路まで 草が 埋めていく 文 秋
思い出の 路を 失意の影と 行く どんたく
露路に住む 素顔の どこに 夜の蝶
帰宅時間 きまらぬ路地に 靴が鳴る
或る時は 路傍の 石である 安堵 葵 水
ふるさとへ 空路で 錦飾った 氣 迷 朗
四国路へ 罪ほろぼしの 杖をひく 圭 井 堂
通行料 俺も マイカー族となり 春 巳
とうちゃん の 機嫌は 路地を 安来節 芳 子
迷路かも 知れぬ 思案の 辻に 竹つ 滋 雀
日暮れの 路を お前も 持てり 蝸牛 薰 風
人生の 迂回路 ここは 療養所 通 児
近道と 知って 以来の 路地を 抜け 波 郎
路上駐車 くるくる 回るだけ 回り 花 梢
迷路から 刑事と 思う 貌が 来る 孝 風
仁義礼 智信 私も 好きな 路 日 満
燃える 赤路傍の 花の 抵抗か 柳 志
燃いて 行く 路の 嶮しさ 七回忌 清 造
道路まで はみ出している エゴイズム 弥 舟
生きのびて 路面電車の うとまれる 徹 生
路面から 追われ 地下道 歩道橋 柳 宏 子
ヒロインを 岐路に 立たせて から 次週 素 身 郎

革新路線 知事 先頭に 腕を 組み 欣 一
袋小路 やっぱり 帰り 着く ところ 豊 太
露路の 奥まだ 競輪を あきらめず 米 雄
自尊心 背中に 女路地に 消え 太 茂 津
故郷の 道路も 姿変えて いた つき 子
父かつて 歩いた 路か 火が こぼれ 天 樹
県政の 差か 舗装路が 急に 切れ 東 洋 樹

兼題「幸」

岡橋宣介選

一坪の 庭に コスモス ゆれる 幸 弘 朗
栄枯盛衰の いまの どの 辺に いる 幸ぞ 日 満
口先で 得た 幸せで 落ちつけず 一 舟
幸せに 居て 幸せを 追いかける 肖 二
肩たたく 孫あり 幸せ かみしめる メ 女
空港へ ついた 幸せ すぎる 顔 春 巳
幸せを 丸出しにして インタビュー 徹 舟
神様も 幸せ 探している 神話 醉 々
児の 幸を 祈る 矢車 青空に 好 史
生きを 母見とどげに 来て 泊り 雀 踊 子
仲人が 幸せ そうな 披露宴 静 馬
幸福から 覗く 世間は 丸く 見え 吸 郎
仕事に 追われている 内は 幸せ 忘れ 居 明 朗
倅せになる 人相を はげまされ 柳 志
幸せは 人に 誇れる 友をもち 次 章
幸せが 来そう 教会から かえり 操 子
アルパム の中 に 幸せと じこめる 千 寿 子
ふたりだけの 幸おんな 窓を 閉め 潮 花
酔うだけ の時が 幸せ とは 哀し 紅 月
しあわせ と 思わぬ 女口 尖る 定 子
幸せな 夫婦 時には 背を むけて 小 石
幸福には 見えぬ 浮世 絵の 女達 薰 風



左から増井不二也・大井正夫・東野大八・不二田一三夫
後ろ向き堀口堯人・近江砂人諸氏。(カメラ・新之助)

幸せの中に割りこみくるマイク
幸せな女の影がよく動き
お幸せですかと白々しく女
コップ酒のしあわせ明日を
幸はずる愚問は海へ沈めよう
幸福という字が多い手紙来る
幸福を知らず写真も添えてあり
花屋から今日の幸せ購ってくる
つかのまの幸ひとりつきりの昼の風呂
幸せの頂点蟻の列思ふ
易の灯の幸福という卦にすぎり
幸せそうに女は会社辞めてゆき
虎城

花村
智子
小松園
万樹
天一
三夫
牧人
静夢
青一
太路
柳宏子
虎城

父の日に風鈴届く遠い子よ
幸せへ声の大きい御用聞き
幸せは貧乏ゆすりをする父で
髪なぶる風に幸せかと聞かれ
幸せを慣れて女の素顔がない
幸せを求めて造花海を越え
管置の位置にも幸せ溢れさせ
一家安穩柏手の中の幸宣介

兼題「七」
近江砂人選

まだ七つ親あくせくと藤間流
監督にラッキーセブンなどはなし
七光り専務の椅子で徒食させ
商魂は七堂伽藍へ置く車
七人の敵の一堂のアイシャドウ
七輪を使う屋台が芝居めき
七宝の帯止めなで母おもう
焼茄子の味も七夕近くなり
七掛けが原価と税務署押え込み
お七夜が来たのにどの名も気に入
喜の祝い曾孫も七つの宮詣り
ハネムーン七堂伽藍も七つの空
七癖へさすが親子と笑い合い
ラッキーセブン来ないまま定年か
職人に七曜はなし原爆忌
七色の虹真二つに那智の滝
減反と休耕七夕さんも雨
何にでも七味をかけて齡という
箸袋七つ集めて旅がほしうみ
来年の七曜表がほしい刻
七階の粗品へデパート客を呼び
七転び八転び負けれない父だ

酔夢
波郎
清造
美代
菓子
水客
宣介
摩太郎
豊太
誓二
春巳
綾美
伊女
伊升
浩代
千茶
阿茶
芳子
薫風
孝風
太路
日満
水客
静歩
竹荘
磯庄

七曲りドライブウェイで富士が見え
順番におぼえていない虹の色
七草の今は名さえも忘れられ
七人で一組となる福の神
七十の胸にも消えぬ清い恋
退院へ一歩近づくと七分粥
食通の自覚七色唐辛子
シャボン玉七色に舞い空青し
喜寿と古稀人もうらやむ夫婦仲
坊さんも気持ちがらくな七回忌
七五三鳩も嬉しが舞い降りる
七夕へ五人のわが子みな女
七夕の下界へどろと交通禍
舞台もう七光りではない拍手
七回忌光増す人消えた人
七回忌雲の峯から励まされ
魔の七回ラッキーセブンは相手方
まだ七つは七対一へ散りはじめ
七福神いつも無精な坐りよう
七光りスターの子供もう売れる
生きていく七つ道具に免許証
七品へ沢庵漬まで数に入れ
若鮎や七ツボタンは還らない
台風一過北斗七星冴えわたり

(河井庸佑整理)

いさむ
聡夢
小石
勢火
無閑
白汀
波郎
孤呂二
一三夫
春果
幸代
清造
町紅
好郎
欣一
紅月
眉水
柳志
一村
花秋
文笑
天馬
静馬
静夢
人

★
本年度の路郎賞、川柳塔賞の発表と同人総
会は十月三日御堂会館(南御堂)で開催。

大阪文化祭川柳大会へ

提言

本多柳志

◇昨年十一月私は第二十二回大阪文化祭川柳大会に出席した。そして毎年の事ながら大きい失望を感じた。それはまるで大阪の川柳大会らしくない、活気の乏しい否活気の全く無い、極言すれば老人ホームのお通夜句会其のものと似た殺風景な会場内の、あちらに三々ちらに伍伍、総数四五十名位の人達がタバコを吹かしながら屯しているが、ちっとも楽しそうではない。大阪の川柳大会が何故に斯うまで年を追うてさびれて行くのであろうか。これには色々原因もあるが、理由もある事だろう。今にして其の原因を探究して除去し、其の理由を発見して是正せぬ限り、年と共に末細がりに追いつまれるのではなからうか。私も川柳人の一人としてこれを憂うる故、二三の私見を提言して大阪川柳人の深い考慮を促したい。

◇私が出席した時たまたま顔を合せた女性作家は「今年は秀句入選の通知が来なかった。入選してない大会には、用おまへんねん」と云ってサッサと退去して行った。秀句に入選通知があることを初めて知らされた私は、年々集りの悪い原因の一つは、案外こんな所にもあることを知らされた。投句者の中には入賞だけが目的の人も多いと思う。入賞してない句会に用のないのは、この女性柳人だけではないと知るべきであらう。大阪の川柳大会にこんな制度のあることを、凡ての柳人が知つたならば、恐らく次回からの出席は半減するのではなからうか。断然

(一) 秀句入選通知は止めるべきである。

◇会場に活気のもり上りのない原因の一つに記名式投句がある。入選句の被講に対して、一々大声で作者が呼名する所に会場に、活気が出て来るものである。記名式投句だと一々呼名する必要がある。呼名せず共ちゃんと呼名するのだし、秀句に入選すれば印刷して貰えるのだし、市長賞が貰えるんだから、何も殺風景な会場で寒さに震える事もないのである。席題は勿論、兼題のハガキ投句の場合も何かの方法で、選者に作者を知らさない事が必要であらう。考えれば出来ない事はなからう。当局者で一考してほしい。昨年の大会で一選者は秀句発表の場合「こんなベテラン作家に市長賞を与えるのは、川柳大会の本旨ではないのだ」と断っていたのが印象的であった。選句の場合殊に秀句を探る場合に、選者に作者を意識するなど云うのは、云う方が無理であらう。無記名式にすれば選者の方でも、作者を全然意識しないで、作品本位の公平な選が出来ると、被講に当って呼名のない句は、作者不詳にして秀句の決定は、出席者優先にする

位にすれば、恐らく投句者の全部に近い人数が出席するのではないかと思う。

(二) 大会は断然無記名式を断行すべきだ。

◇大会に出席の少い原因の一つは、宣伝の不足と其の拙さであらう。川柳大会のあることを知っているのは恐らく、柳誌の読者だけではないからうか。新しい川柳人を集めて川柳人口の増加を計り川柳の社会化への絶好の機会である、この大会をもっともっと、一般市民にPRせねば嘘である。市民川柳大会の名が泣くというものだ。宣伝の先ず第一は、バスや地下鉄内の吊り下げ広告を有効に利用することは勿論、街頭の要所要所には立て看板、それに大会当日の新聞に大いに書いて貰うことも有効であらう。又当日の会場入口の立て看板も、もっともっと大きなものにし、一

般市民の参加歓迎も大きく書き出し、講演者の名前も又大きく宣伝する必要があらう。パスの中の毎月の行事にも書き足して貰うこと。パスや地下鉄の吊り下げ広告も、其の気になつて見せばスポンサーの二つや三つは、いつでも探つかつて思うが、どうであらう。要するに関係者がやる気になれば、宣伝の方法も外にいくつもあると思う。こんな機会を利用して大いに新人を集め新しい時代の川柳といふものを、一般人に知つて貰う絶好の、大会とすべきであらう。

(三) 宣伝をもつとつと大々的にやること。

◇凡そ川柳の中にも、作句よりは選句眼の秀れた人、作句や選句はも一つだが作句を得手と云う人もあるのである。川柳大会が毎年毎年紋切型のように、各柳社の主幹の人を無条件に選者に起用していることは、この意味からも再考の余地があるのではなからうか。大会の面目や権威から、柳界の古老大物を揃えることも解らんではないが、これでは凡ては本柳人の納得のいく選がむつちくし、時には本誌二十六号の薫風氏のような批判もうけねばならない。老人の選ではどうしても懐古趣味が顔を出し、ぬける作品にも革新的なものが少く、若い作家からも、兎角の批判をうけることになる。もつと傾向のちがった、出来れば若くても秀れた選句眼のもち主を、大会の選者に起用したらと思う。文芸の興隆はかかつて選者に、人を得るか否かにかかつていると思ふからである。

四大会選者の起用には一考あつて然るべし。

◇市民川柳大会は、各柳社の句会の延長であつてはならない合同川柳句会であつてはならない。そこには色々な点で、市民川柳大会としての、特徴があつてはよいと思う。例えば課題についてであるが、既成川柳人の外に一般市民も参加することも考慮したものがあつてよいと思うのである。例えば昨年の「公害」「神話」といったような、一般川柳人や市民は、一体このごろの世相や政治の実態をどんな目で見、どんな感覚で捉えているかと云う事を川柳を通して見て見たい。所詮文芸は置かれている世相の反映でなければならぬといふ、歴史の一頁でもなければならぬと思ふからである。選者にもそういった方面への敏感で、正確な感覚をもつた人を起用することも、大事なことだと思ふ。

(四) 市民川柳大会は句会の延長ではない。

◇最後に川柳賞についても一言触れて見た。大阪文化祭川柳賞としては、現在の賞品は余りにもケチくさい。実は私も二度この川柳賞を受けたが、知事や市長名の賞状にしては、余りにも見すばらしい。殊に現行のもの、小さなペン字横書きのものは、なおさら載けない。矢張り以前のような縦書き大字のものが、堂々としていて額にして飾るにも、重厚味があつてよいと思う。それと賞状の外に何か副賞をつけるべきだ。今年の大会からは副賞として、カップ位はつけるようにして見はどうか。別段賞品を貰うばかりが本旨ではないとしても、やるからには受賞者が喜

ぶものにして、人に見せて自慢の出来るようなものにすべきではないか。府や市にしてかならぬが、大した予算でもないと思う。案外こんな所にも、川柳人口が少くなり年々老化し、従つて川柳の社会化のテンポが、遅い原因があるのではないだろうか。

色々と思いつくまま、私見を述べたが大阪の柳界幹部や、一般柳友諸兄の一考をいだければ大変幸いである。

★ 菊沢小松園氏は七月二十六日、本年度の文化祭川柳大会打ち合わせ会に出席された。これは、中島生々庵主幹が久々に兼題の選者として出席される。

大鉄川柳会

大江	秋月	保西	岳詩
吉原	紅月	丸川	初甫
正本	水客	阿万	万的
宮口	笛生	植村	客遊子
辻	白溪子	都倉	求芽
山田	季贊	松川	杜的
永尾	英断		

小浜紀行(上)

西尾 栞

大阪駅九時四十五分雷鳥二号のグリーン車にコンパになって納った七人は、米原駅着締切『入れる』という席題になやまされていた。例によって、コンビの圭井堂、静馬が並び、向い側は好郎、小松園。通路を距てて、形水、栞、前は葉子さん一人という座席。空席は、多久志が乗る筈だったが、敦賀に用事がある、昨日から先行して昨夜は敦賀泊り今朝十一時三十九分に敦賀駅で落ち合うことになっている。この旨を幹事役の栞から一同に伝えると、

『それはようある術や』

『旨い具合に敦賀でよかった』

『広島やったら、こうはゆかぬ』

と経験者は、語るに落ちる半畳を口々に入れた。

京都を過ぎた頃、小松園から船が配られたが、句はさっぱり出来ない。

葉子さんは煮ぬき玉子の皮をむいて配給してくれる。鮎と卵が口の中で変な味となる。能登川を過ぎて、間もなく彦根城の見える頃心配していた天気が、本日は小雨なりという烙印を捺してくれた。

何んだ、かんだと言っているも、米原へ着くと約五十枚の短冊が集った。敦賀迄二十二分

大急ぎで清記互選する。題の割に案外真面目な句が並んだことは、自称紳士の集りか。

入れ知恵とわかる代理の吃りよう。好郎

係りへのリベート入れた見積書。同

当選祝一票入れた顔で来る。同

大入りのわりに売上げすくなくすぎ。静馬

大鳥居入れたら顔が小さすぎ。同

入れかけてみたがつづかぬ貯金函。圭井堂

入智恵もみなチョボチョボで、にばれ。同

月光をベッドのそばへ入れさせる。同

近所への気兼ねって入れたり。小松園

恥かかぬように財布へ入れてやる。形水

金入れる程の才能見当らず。同

北風をいれて心をととのえる。葉子

入れかわりたちかわり孫が来る客間。栞

十円入れて按摩機へ目をつむり。同

入れたはずやとひっくり返す旅靴。同

改札には、レインコートに身を包んだ、多久志が一行を待っている。

自動車を二台連らねて、先ず気比神社へ参詣する。ここは長が生きの神様で、長命の井戸がある、我れ先にとその井戸の水をがぶがぶとのむ、これ以上長生きしたいとはあさましい。気比の松原は人口五万余の敦賀が誇る

景勝の自然公園であった。敦賀、小樽間のフエリーコースが出来て、近時発展途上にある良港の街の噂を、運転手と話しながら美浜港に着いた。日曜日の三方五湖巡りの定員五十五名の船は三つの棧橋から、小雨に煙る湖上へと、発着して大変な賑わいであった。

中食を虹岳(こが)島荘のスイヒロでとる

予定の我々は、地図の、裏見川をもう一度見たかだったが、久々子湖、水月湖、三方湖、管湖を廻って、虹岳島で下船した。傘をさしても、ささいでもという天気で、フト見つけた薊の花の色に、島に上ったという感じを深くした。

虹岳島荘は荘の名にふさわしい、民芸風の建物で、部屋は水月湖に突き出ている、造作も民芸調で、皆の気に入った。昼食は

噛めば噛むほど

ふかい味ある肉の方

そんなあなたがなせスキヤキに

私しやコンロで熱くなる

こんな音頭の、ピフテキにビールの満をひく。給仕の女中さんは、若狭生れの若狭育ちという娘で、一言いう毎に、傍の者の背中を叩いて喜ぶ賑やかさに、ついつりこまれてポチ袋に入れたチップに、それではお粗末と、小松園が偶然もっていた、大きなし袋に、二重袋にして渡すと、「これはこれは、重ね重ねの御心付、誠に有難うございます」という、ウイットに一同今夜はここで泊ろうやと湖畔の宿が大気に入り込んだ。

クラクションの音に、残念ながら座をたつて、車の人となる。今夜の宿泊地小浜の青浜館は曾て、陛下のお泊りになったところ、その部屋が開放されているというのが、今度のこの一泊旅行の目的の一つとなっているのである。一時間余にして、青浜館着、小浜湾に面した十畳二間の室は、御殿襖に緋の房がついていた。洋服箆筒にもやっぱり緋の房がついていた、女性用の桐の和箆筒もおいであつた。

昼のビールがたたって、もう句会やる元氣



もなく、湯から上って、宴会の六時まで、各自暫しの睡眠をむさぶつた姿を見て、齡は争えぬとみたまは菓子さん一人であつたらうか。夕食は海幸の料理、流石若狭湾をひかえただけに、新鮮さと量で満足させてくれた。

ここは梅田雲浜先生の出生地とて、芸者のひく三味線は、

妻は病床に臥し児は餓えに泣く

の時吟入りであつた。

詩吟に散会して、一同部屋に戻ると、按摩をとって、コテンパーン。これもよる齡波か。

「菜の軒が、一番大きいな、しかも往復やつた」という声で目が覚めた。(つづく)

山陰の柳友を迎えて

— 路郎忌後日ものがり

路郎忌川柳大会の懇親宴で、安来節をいいノドで披露した通児、鶴丸氏が一泊する以和貴荘が第三会場になった。

天笑氏が久米雄氏に見てもらう句碑建立のカラーフィルムの上映だ。

速来前記三氏に、明朝、祥月、叮紅、(島根) 素身郎(倉敷) 弘朗(倉吉) 諸氏に、地元(萩、摩太郎、万の、花梢、鬼遊、つき子) 諸氏に一三夫という賑やかさである。天笑氏の解説入りでミニ映画館は超満員という盛況ぶりだった。萩氏が久米雄、弘朗氏を誘って

自宅で飲み明かせば、通児、鶴丸氏も阿倍野界わいを飲み歩く。

小松園氏は、広島組の静水氏ほか、島根組の正朗、清泉氏らを大阪駅まで見送り、一つ的美談をのこされた。

翌十二日は摩太郎、天笑氏らが松江組を堺市内観光にガイド役をつとめるなど、川柳愛があつちにもこつちにも、時ならぬ花を咲かせたものである。

大阪の娘子軍に、吉岡通児氏の評判がよかつた。

「口数がすくなくて誠実そうで男らしい」とのことであつた。(F)

(写真は堺妙国寺蘇鉄前で、左から恒松叮紅・藤井明朝・岡崎祥月・吉岡通児・柳葉鶴丸諸氏、カメラ天笑氏)

黄銅六角ポルトナット

及び特殊換物全般

合資 西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地

TEL (06) 三四五二一四

夜間 654 四四〇八

川柳家の暦

(九月生まれの人)

「川柳家の暦」は故白柳さんが数年前この取材に走りまわった力作である。十二月分までノートに書かれてあるので順を追って発表していくが、句は白柳さんが選んだもので作家の代表作という意味ではない。

(編集部)

遺稿 清水白柳

1日	岡本鳥石 M27 甲午	山口	6日	秋山竹詩 T2 癸丑	神戸	13日	濱田古城 M37 甲辰	高知
1日	世話仕て置くもの今日の旨い酒	山梨	7日	安武九馬 M39 丙午	福岡	13日	裏木戸をあければ腹の立つ駐車	川越
1日	岡村春岳 T10 辛酉	大阪	8日	黒田節黄金の水のあるかぎり	小樽	13日	山崎涼史 T2 癸丑	桐火鉢昔のままの菓子が出る
2日	金指輪疑い深い過去を持ち	京都	8日	長沢としを T9 庚申	東京	14日	和田維久子 M42 己酉	弱点を大風呂敷に包んどき
3日	妻だけが染めて私に染めさせず	越前	9日	初対面どっちも汗をふいている	大阪	15日	吉田水車 M35 壬寅	名古屋
3日	松川杜的 T4 乙卯	京都	8日	牛島健吉 M38 乙巳	京都	15日	信号のない世の中は楽しかろ	松山
4日	子の風呂は長ごても短ごても叱られる	越前	9日	吾郷玲人 T1 壬子	大阪	16日	立志伝母鬼となり弥陀となり	静岡
4日	鈴木柳芳 S3 戊辰	川越	10日	行先きも云わず笑って出る浴衣	京都	16日	干し物を取り込み忘れ月をほめ	高知
5日	制服で出れば追う子もあきらめる	和歌山	10日	竹沢拓二 M37 甲辰	京都	16日	新谷恵俊 S11 丙子	高知
5日	喫茶店事務所代りにして使い	和歌山	10日	深緑妻にそばかす見え初むる	京都	17日	カタログは豪華に詰める冷房車	松江
5日	楠貞子 S3 戊辰	竹原	10日	桜本龜野 M43 庚戌	宿毛	17日	鮎一尾明日は別れる人と座す	松江
5日	生け花も枯れて病院不気味なり	大阪	10日	舞う唄う鶴と亀とか入りみだれ	宿毛	17日	宮口笛生 T15 丙寅	奈良
5日	宮嶋天真 M30 丁酉	大阪	10日	貧しさを気にせぬ男の子の寝息	長野	17日	出動のぎりぎりまでを男寝す	高知
5日	四つ橋のさて橋の名はなんととなに	大阪	10日	堀江正朗 T1 壬子	島根	18日	小橋水容 T15 丙寅	高知
5日	伊藤茶仏 M37 甲辰	小松	11日	目がさめてまた一日の闇刻む	島根	18日	警察へ今日は野球の果し状	高知
5日	考えがどっちつかず妻をやり	奈良	11日	中野懐窓 M29 丙申	横浜	19日	黒木鶴足 M30 丁酉	兵庫
5日	伊藤勢火 T1 壬子	奈良	11日	鮎は水の中の風かやもう見えす	横浜	20日	親の代から人らしくないことに馴れ	岐阜
6日	みそ汁の味に夫婦の故郷別	奈良	12日	山口鉄三 M41 戊申	神戸	20日	不機嫌な父でみんなを風呂へやり	岐阜
6日	金子呑風 M28 乙未	上田	12日	維木林へ消えゆく如く老婆逝く	神戸	21日	宇和川木耳 M28 乙未	東大阪
6日	母さんにまだ用がある風呂の順	上田	12日	岩谷二三枝 T2 癸丑	広島	21日	外国の煙草をもろう日本海	東大阪
						21日	金枝久五郎 T4 乙卯	青森
						22日	次に咲く花へ早起き水やり	青森
						22日	石上軽舟子 M42 己酉	愛媛
							門灯へ来て釣銭を読みなおし	愛媛

23日 太田 茶人 M35 壬寅 京都
 忘却の人生なれど日記書く

23日 早川 清生 S4 己巳 大阪
 店の壺どれも貧しき町うつつ

24日 榎本 聰夢 M40 丁未 岸和田
 洗面器うれし夢をふと忘れ

25日 武田 北人 M36 癸卯 豊中
 物何故に横に流れることを好く

25日 江指 静古 M39 丙午 金沢
 芋棒の鱈がはざかる妻揚枝

25日 川岡 雲眼子 M40 丁未 諫早
 注射した血汐と知らず蚊がたかる

25日 生信 笑子 S23 戊子 竹原

26日 人は皆ふりむくことも知っている
 増井 不二也 M38 乙巳 神戸

27日 小浜 牧人 M44 辛亥 西宮
 辛口を好んで男盛りなり

28日 丹波 太路 M23 庚寅 寝屋川
 カンと鳴りそうな漁師の肌の色

28日 香川 酔々 T9 庚申 八尾
 老友に似すぎて笑えない羅漢

28日 稲村 雀穂 T13 甲子 静岡
 改札の表情くずすまいと切る

28日 河内 天笑 S9 甲戌 堺
 度のきついなレンズの奥に棲む拒絶

29日 荻原 スミエ T8 己未 神戸
 星無限倅せうすき別れた子

29日 滝本 星城 T12 癸亥 高知
 三カ月もう職人の生まあくび

30日 坂手 有子 M41 戊申 岡山
 眠つけない人はお経をよみなさい

30日 柳楽 鶴丸 S3 戊辰 松江
 人生へ東風も吹けば北風も吹く

30日 板根 寛哉 S7 壬申 京都
 わが子ならわかつてくれる父の笛

(★有名柳人が脱落している月もあり、白柳氏はいまは亡く、この点ご諒承のほどを)

近 詠

須坂市 高峰 柳児

補欠出る暮なくガムを噛み続け
 今日汗ばって日銭を振りかえり
 借りた智恵計算にない語でかえり
 温め合う人情過疎にある吐息
 手を挙げるはったり参観日なごませる

大洲市 米澤 暁、明

幼稚園みんな上手にして羨け
 暮あいを待っていましたコンパクト
 枕辺へ鐘が届くも京の朝
 往きかえり何かささやく蟻の列
 健康はいいな額の汗をふく

今治市 月原 宵明

ホステスのほくろほんまか触れてみる
 車椅子に待べり金婚式撮す
 山門も鳥居も乗用車でくぐり

噴水の風が変って恋移動
 呼鈴で生ける屍老妻を呼ぶ
 路郎師七回忌
 生命ある句を見つめたる師の眼鏡

和歌山市 秋月 宏方

平均寿命この公害の中に延び
 祭の夜下駄をはくのも久しぶり
 出前持こたこが来て来た都会
 老夫婦負けて歯車かみあわせ

岐阜市 市川 鱈魚

この家にすぎた生活の熱帯魚
 連れ添ってみれば可愛い泣きどころ
 絹物にひっかかる手で里の母
 左様なら金がつないでいた二人

今治市 長野 文庫

竹割ったような気性が敵もあり
 廃品の処分に困るGNP
 騎虎の勢いへ弁護士さん拍車
 弱点を補うつもりつけはくろ
 番犬として臆病が役に立ち

手 相

吉田 圭井堂選

相性も手相も良かった荷が戻り
美しい手に倅せの線がなし
手相には女難があると喜ばせ
手相見の言葉信じて嫁き連れ
手相見を感心させて高うつき
手相ではいいがと顔へ天眼鏡
手相見をある日先生と呼ぶ落日
眠る兎の手相に母の夢をかけ
お上手が言えぬ手相も親ゆずり
手相見の結論努力次第とさ
ローンクの光りが神秘にした手相
港町赤毛も手相の灯をくぐり
酔っている手相大きな夢を聞き
おぼはんの色気にかつい掌も
良い手相もった子供にすぎりつき
気のせいか運命線が乱れてる
一寸みてもらう気にも手をひろげ
ほどことなくゴリラのまな手相持ち
はめられた手相の運がいまだ来ず
迷う日の手相たっぷり聞かされず
お互いに違う手相の共稼ぎ
手相見とコンピューターが雑居
手相見え気にする程の暇がない
病床で生命線を頼りにし

若死と言われた手相が古稀迎え
日雇いの手にたくましい生命線
凶と出た手相は親のせいにする
一笑にふした手相が気にかかり
カカ天下と言われ手相へ笑うとき
素晴らしい手相で定退平のまま
手相見てやろかは俺のテクニク
手相でもはつきりしないことを云い
苦い過去にずばりと触れて来た手相
長命の手相 自慢が通夜の主
手相から次は人相へ金が要り
どう見ても金には縁のない手相
生きていくことが不思議と云う手相
こんた人があって手相をほめて
良い悪い言うても仕方のない手相
手相観の一言胸に突きさささり
出世する手相 貧農のまままで
暗がりでもしんみり手相 話し込む
手相見をけなしてみても気がかり
いい手相してると努力を認めない
松下に似てる手相とおだてられ
手相観が最後にくぐる 縄のれん
佳

運命線豊かに伸びて癒えきららず
いい手相だがと怠慢責められる
見料のつりは要らぬとめいられる
手相から見れば粗末な今の地位
はめられた手相大事に抱いて去に
ふらふらとつい手相見の鴨になり
人

誓二 代仕男 久司 利美 初浦 白汀 どんたく 静泉 花子 悠泉 弘朗 梁水 曉童 双葉 肖心 古心 不二 鎮也 木魚 杜月 敬一 素身郎 緑水 七面山 洋々 露杖 葵水

手相観が戻る都会の吹き溜り カズエ
おん手相三十二相通り彫る 古方
天

地

なつメロ

麻生アート選

台所の母のなつメロちと音痴 恵子
なつメロのヒット残し歌手は逝き 双葉
客寄せは軍艦マーチちんどんや 昌道
なつメロのテレビへ母の指定席 迷朗
老歌手の声を裏切る大写真 花子
なつメロをアレンジされた味気なき 智司
なつメロの二番目からハミング 葵水
なつメロがLP盤で里帰り 敬一
なつメロのあの頃にも食いっつき 白汀
なつメロも聴いて嬉しホームバー 敬一
直立で歌う東海林の子守唄 カズエ
なつメロを寝かす子供へ口ずさみ 藤持
なつメロの海も公害には勝てず 国彦

阿万万的・松川杜的著
句集「的」
送料共 四五〇円

吟 題 課

なつメロのだらりの帯も昼はミニ
 なつメロが思い 出させる片思い
 なつメロへ 思わず 酒が過ぎた夜
 孫連れてなつメロの歌手局へ来る
 なつメロを聞きに病人起きて来る
 なつメロは軍歌選らぬ子をしのび
 なつメロは俺を二十才にしてくも
 歌屋ではなかった 歌手の厚化粧
 なつメロと来れば社長も手をたぎ
 なつメロに 音痴も歌う クラスも
 なつメロへ むっくり 起きる臍枕
 思い出のなつメロを聴く貸し浴衣
 なつメロの天城を越える雨のバス
 なつメロは 軍歌同期の 生き残り
 なつメロにあの時の借り思いだし
 なつメロを 自慢の のどは鐘一つ
 山岳部なつメロなどをふりむかず
 先輩 後輩 都の 西北声 揃う
 妻と兵隊うたいつつ 妻かりすすむ
 まな板のリズムへ 唄う チャツチャツチャ

輝親 素身郎 百水 本蔭樺 代仕男 木魚 醉々 十止庵 不 宵明 二 松花 止水 信二 祥月 曉明 曉明 三十四 曉童

和宏 隆子 秀峰 千翁 新之助 魚山 梁水

僕の年見たか流しのモンパリー
 なつメロが三すじの糸に乗る場末

茶 柱

佐野ト占選

茶柱へ祖母がよろこぶ見合いの日
 茶柱へ 思ひは 遠い 故郷の 母
 茶柱が立って 連は 向いて 来ず
 茶柱が立ってうれしい日がつぎ
 古い給う母茶柱を もう云わず
 茶柱に縁起かつぐも 親なれば
 茶柱を じつと 見つめて 見合すみ
 茶柱へ 何のことなく 今日も 暮れ
 茶柱の中で 縁談 勧められ
 茶柱で 女将は 今日 運を かけ
 発表の日 茶柱に 裏切られ
 茶柱へ 吉報らしい 電話 べれ
 傷心の 朝茶柱に 支えられ
 茶柱に 宿の 女中の 口上手
 茶柱も 縁起を かつぐ 職に 生き
 茶柱が 立ち 決心が また 変り
 茶柱の 縁起も 夢の中 消え
 人間の 弱さ 茶柱 信じ 度なし
 茶柱を 笑い 邪恋の 悔い も なし
 茶柱が 信じて 男を 疑わ ず
 茶柱が 立って 明るい 老夫 婦
 茶柱の 立つとも 悲しい 茶を 供え

花子 梁水 祥月 道雄 里風 露杖 初甫 曉明 静歩 古心 利美 昌道 誓二 佳女 静泉 祥月 本蔭樺 十止庵 巴ッ脱 思月 緑水

くにもとで さいいた 茶柱とは 違い
 茶柱を見付けた 朝の 長火鉢
 一人もの 茶柱立とうが 立つまいが
 いつ迄も 茶柱あつては しい 恋
 茶柱を見せ てうれし さ 匂わせる
 茶柱へ やはり 迷信 捨て 切れず
 迷信で よし 茶柱を 喜こびぬ
 茶柱を 云わぬ 昆布茶の めでたい 日
 茶柱が 立ち 一人が 嬉し がり
 茶柱が 立ち 女客 かしまし しい
 茶柱に キヤツキヤ 赤い パンタロン
 茶柱を 覗く 瞳に 慾が 見え
 茶柱が 夢をもたせる 日の デート
 茶柱の ことにも ふれた 裏話
 茶柱へ 何やら 母の 一人ごと
 下積みに 耐え 茶柱に 希望もち
 茶柱は ひとり で たてる 日の 空虚

古方 松花 伶人 宵明 千翁 曉風 七面山 章雅 緑水 宵明 古方 緑水 潮音 静歩 恵子 秀峰 寛

西尾 葉著

句集「水鶏笛」

送料共 六五〇円

残部少々

茶柱が 別れ話しの 冷めた 茶に

初歩教室

— 題「生」 —

本田恵二郎

—— 知らぬ間にポツンと建ってた僕の句碑 ——

倉敷市児島下之町のキョクトー被服会社（久保俊雄社長）の中院に、一年三カ月前に、僕の句碑が建てられていたのを、最近ふとしたことで知って驚いた次第。そのいきさつが爽快である。同社に従業する青年男女の自主的企画で、社内にか記念になるものを建てようということになり、協議の結果、石に何か良い言葉を彫って建てることを決め、その言葉を物色して、見つけたのが「足跡を残そう砂のある限り」の一句だが、川柳であるなどとはご存知なく、座右の銘にするに良さ言葉ということで選んだのだそうだ。川柳と無関係の人、殊に若き世代が、感動してくれたことは、川柳の対社会性を主張し続けている私にとっては、とてもうれしいことである。女子従業員の父に石工さんがいて、若い男女の心がけに感動して、石材を提供、彫りも無償、そして若者たちの努力奉仕で完成したのだそうだ。こんな例は、古今東西かつて

無いことのように思えて、私はほのぼのとした爽快さを感じたものである。とんだ自慢げな話になってしまった。さていつもの如く、皆さんの熱吟と対決をすることにしよう。

生き抜いた苦労がにじむお人柄
誓二

（生き抜いた汗がしみてるお人柄）
生意気な事を云っても添寝させ
花子

（生意気を云うくせ添寝せがみます）
過疎村に双児が生れ万歳し
つとむ

（双児誕生過疎の村中湧きたたせ）
隅っことで蚊も生きてる地下の街
本陸樺

（地下街の隅で蚊の泣くように生き）
ただ生きていくというだけの底辺
塗杖

（ただ生きていくだけとはかなし底辺）
生来の筆不精と前書きし
杜月

（生来の筆不精でとご達筆）
公害の病氣生命線に出てこない
翁童

（公害病生命線をあわてさせ）
一生をあなたに賭けた身の果報
利美

（一生をあなたに賭けて悔いはなし）
聖職に生きる喜び噛みしめる
静泉

（生きがいを見つけた聖職しかと抱く）
生々とした眸を揃え新入社
美代

（新入社どの目も若く生きてる）
女性上位で飲まれてます生ビール
春海

（愛妻にピン生半分飲み取られ）
生水を旅で飲むなど注意する
隼人

（生水は毒よと車窓へ母の声）
生唾をのんで到来の包みあげ
まさひろ

久司
（ランドセルに足がはえてる一年生）
静子
（誕生日思い出さずもすこやかに）
（かくしやくと忘れはてる誕生日）
（ストストに自衛どちらも生きる知恵）

藤持
（労資とも生きねばならぬ知恵合戦）
保夫
（生意気な奴やと口もとほろぼせ）

双葉
（この生意気めがと目を細め細め）
（ギャンブルのとりこ生業置き忘れ）

繁子
（ギャンブルのとりこ生業置き忘れ）
（ダイヤルを廻せば即座に生の声）

富士
（ダイヤルはうれし即座に生の声）
（新婚で生煮えの芋云いもせず）

濁水
（生煮えを笑い合えるも新世帯）
（生産が増えでも物価高くなり）

三十四
（生産が増えでも値上げする不思議）
（生き抜かん必至の努力松葉杖）

秀村
（生き抜くぞ負けるものかと松葉杖）
（生れ来し孫の生長見るぞ楽し）

葵水
（老いの生きがいすくすくと孫育つ）
（生きてる噂に影がよみがえる）

万竿
（生きてる噂に影がよみがえる）
（生きてるらしい噂に影が浮く）

万竿
（草の実の生命の限り風へのり）
（風に乘って乗って草の実の生きる知恵）

万竿
（涙またさそう遺影の生けること）
（涙またさそう遺影の生けること）

貞祐
（黒と白生れ乍らのいさかいの枷）
（黒と白生れ乍らのいさかいの枷）

頼次
（黒と白溶け合えぬように生れつき）
（黒と白溶け合えぬように生れつき）
（生きた金使ったつもり迷いません）

(生きた金使ったつもり好きな道)
生ビールがビールの上から呼んでいる

生々しい惨事の時だけさわぎたて

生のままの画伯山下清消え

生活がかかってますとコメディアン

生字引社長も一目おいている

生活のゆとり束の間もう停年

生前を徳ぶ遺品はおがまれる

勲章をもろて長生きしようなり

生かじり次の言葉が続かない

こんど目は男に生まれますと妻

長生きをしてねと長女五十一

新之助
千夏
静観堂

弘生
軒太楼
富喜子

万天子
洋敏

露杖

英詩

近江

大陸川柳作家同窓会

昭和46年7月3—4日
金沢けいさつ会館

ウオッカ

ウオッカに北より北の風だより

将校へウオッカの酔眼がすわり

シベリヤの捕虜ウオッカにささえられ

歓喜仏

そんなとこ撫ぜたらあかん歓喜仏

いのちとはかくの如しと歓喜仏

歓喜仏の次元ポルノのほかにあり

妓生

ヤンパンと見たか妓生酌ぎに来る

妓生の見えない足にある色気

多茂津
良行

塊人
薫風
青竜刀

弘明

二十貫
日満

天津くり

三十八度線

妓生に貧しい老母つきまとい

三十八度線

がむしやらに生きて他人と折れ合わず
死なすより生かそうとする残酷さ
人生のあまから知った鬢の霜
生々としてるはずだよ恋愛中
ピエロにもなります生きる為なれば

慶彦
八郎
比呂路
久子

迷朗
止水
カズエ
敏

茂美
シゲ

賛平

水声

天弓

詩腕郎

水車

大八

青桐

伊升

五柳子

と金

小鮎

可宵

波郎

社告

「近作柳樽」選者、川村好郎氏が八月下旬カゼ引きや疲労から、高石市の今西病院へ入院しました。スグ退院されると思いますが、当分若本多久志氏と共選、大萬川柳は生々庵主幹が代選をします。

川柳塔社

題一 地一 九月二十日締切(十一月号発表)
宛先 岡山県倉敷市下津井三五二番七十一
本田恵二朗

金沢の女と一夜を鮎の膳

金沢

金沢のこんなところに文学碑

四高出のわが子もすでに五十肩

入園の無料誇らぬ兼六園

禅

禅の目にまた俗塵のバスが着き

禅寺のからす阿呆と呼びかける

禅寺へ入門をして惜しがられ

仙涙
みひの
今雨

▼東大阪市川柳同好会発足。本会は東大阪市在住、在勤の川柳愛好者をもって組織する
会長竹中肖二、副会長安井久子、会計桑原喜風、庶務滝井竹充、片岡湖風。第一回例会は、近鉄永和駅前、東大阪市教育委員会中央公民館で九月二十五日午後六時開催。題「スタート」。「おしぼり」。「希望」

大 萬 川 柳

「片思い」

入選発表

選者 川村好郎
 投句総数 五百八十九句
 入選 二百二十四句

体当りすればよかつた片思い

藤井寺 いわを

片思い焦ればあせる程裏目

藤沢好雄

もう一度チャンスのはしい片思い

倉敷梁水

片思いではなかつたあととで知り

倉吉弘朗

梯子酒いつまでつづく片思い

大阪比呂路

片思い嗤つてるような臍月

愛媛悠泉

思慕ひと胸に片恋終りそう

米子千代

気付かないふりで片恋いたわれ

大阪保夫

現代子にはまだるこい片思い

倉敷素身郎

片思い今は育児に忙しい

東大阪生長

高嶺の花こころの画布に描きつゝ

倉敷惠二朗

片思い池のおしどり羨まし

大阪春日

片思い夢喰う虫と蔭の口

泉佐野静子

この年で知られたくなし片思い

笠岡忠三

片思いにきびはなやかなりし頃

鳥取洋々

片思いドラマはみんなきれいすぎ

大阪水客

ナツメロに届かぬ恋をかみしめる

岡山止水

宝石のように抱いてる片思い

大阪満津子

あの時に振られてよかつた今の幸

郡山カヅエ

打ち明けずじまいの恋は虹の色

大阪滋雀

男一匹転機となつた片思い

倉敷里風

抽出しへ鍵をかけてる片思い

鳥取佳女

児が生まれふんざりがつく片思い

大阪新之助

既婚ならなおさら募る片思い

大阪章雅

私が可愛想だと片思い

大阪水京

片思いひとりで泣ける夜を待ち

大阪敏

ほれるまで待っているのか片思い

青森つとむ

片思い三面鏡に問うてみる

岐阜鱗魚

ふたりになって気のつく片思い

大阪野迷路

半世紀思いつづけた皇后様

大阪古方

片思いばかりでしたとまだひとり

福原本陰樺

片思い遠い都の空駆ける

八尾酔々

聴診器判つてほしい片思い

大阪小松園

打明ける夢で唸さる片思い

大阪慶之助

片思い心中の記事が羨まし

大阪慶之助

片思い夢からさめてネギを切り

大阪慶之助

君が好きアラそう私何にも感じない

大阪慶之助

片思いいっそ外地へ飛び出そか

大阪柳宏子

片思い周圀の方が焦れている

大阪柳宏子

小石蹴つとばとピリオドの片思い

大阪真沙子

片思い笑うて話せる夫婦仲

大阪真沙子

片思いいっそ外地へ飛び出そか

大阪柳宏子

小石蹴つとばとピリオドの片思い

大阪真沙子

片思い出さぬ手紙の束が出来

大阪 君子

片思い所詮は姪というえにし
きつと好きにしてみせます片思い

富田林 花梢

友達にさぐつてもらう片思い
退院が明日にせまつた片思い

大阪 小路

さりげなく電車を合わず片思い
夏痩せに輪をかけている片思い

下関 木石

吾が思慕は秘し橋渡し引き受ける
その人のミスもかばうて片思い

高槻 静馬

片思いとうとう頭おかしなり
代筆に横取りされた片思い

堺 青香

片思い先も氣付いてきた様子
親に似ぬ内気はがゆい片思い

大阪 一栄

法善寺この娘もいも片思い
片思いでもよし心の支えとす

呉 英詩

不甲斐ない奴と提灯持つてやり
謎かけて胸中さぐる片思い

倉敷 筒子

純情なだけに激しい片思い
影ぼうしだけでもみたい片思い

門真 鉄児

押してみたり引いてもみず片思い
披露宴の片隅にいる片思い

大阪 弘生

新聞で出世を知った片思い
共白髪片思いの人伏せたまま

大阪 進

片思い顔のしわなど苦にもせず
しつこいと片思いうるさい人にさ

岡山 七面山

嫁つてから好きと判つた片思い
片思い誰も同情してくれず

大阪 一三夫

情報化時代というに片思い
ヒット作若き詩人の片思い

堺 一二三

神様のいたずらどっちも片思い
ピアノ今日ヒステリクな片思い

今治 宵明

けん牛へ溜め息をつく片思い
百度石の夜露も見てる片思い

易断がピタリと当てた片思い
妹にけしかけられる片思い

辻一つ尾行してみた片思い
手応えを待つ片思いの永すざる

東大阪 弥生

噂だけ二人を燃やす片思い
手応えなき恋の渦中に縛られる

堺 天笑

片思い職務尋問されている
こんにちはさよならだけの片思い

松原 迷朗

おしめ干すとこ見とどけた片思い
片思いと知らずに贈るプレゼント

片思いと氣付きイメージが変り
人の世ののがさを知つた片思い

米子 瑞枝

氣の抜けたビールにも似る片思い
片思い日記に託して娘が嫁付き

大阪 庸佑

片思い同士が張り合う化粧室
はたの目にいじらしくなる片思い

西宮 百酒

公平に見て片思いだとわかり
世話好きになくさめられる片思い

尼崎 慶彦

片思いしたりされたり青春は去り
片思いだから理想の像であり

富田林 美代

片道の恋を醒ましためぐり逢い
男なら当って碎ける片思い

出雲さんだけが頼りの片思い
完全に無視されていた片思い

捨てるほど女あるのに片思い
バランスのとれない愛が遠くする

かたくなな理性がさせる片思い
スペツシャルコヒに沈む片思い

愛語もう尽きた男の片思い
佳句

大阪 野迷路

片思いゆうへの夢では結ばれる
片思いそれから紫色が好き

倉敷 素身郎

片思い友に背中をどやされる
神戸 どんたく

高槻 静馬

片思い似ても似つかぬ娘を娶り
片思い幽明隔て今もなお

堺 藤持

片思い幽明隔て今もなお
片恋を氣の毒そうに呑むポスト

米子 千代

栄転の胸にたたんだ片思い
天ノ句

大阪 滋雀

友情にすがれば彼も片思い
選者吟

平田 代仕男

片思い同士踊っているジルバ
ベストテン(八月現在)

富田林 秋梢

文代秋梢
千石朗

木恵子

真沙

弥天笑

一三

水里

客風

瑞一

三枝

五三二一〇九八七六五四三二一

第十回「捨て石」
以上略

投句先 川柳塔社 大萬川柳係

九月二十日 五句以内

昭和四十六年九月現在

川柳塔社同人

青木遊星 青山慶之助 浅川八郎 浅野芳朗 麻生アト 阿部柳太 尼緑之助 天見幸雄 阿万万的 有信新之助 安平次弘道 飯田一治 池田古心 池田泉水 井阪東天紅 石居高志 石川侃流洞 石倉旅風 石坂新雪 磯島三石 磯野与志

市岡曉舟 市場没食子 出原敬一 出原直奇 伊藤茶仏 井上湧三 今西章雅 岩田ひさお 岩田美代 岩本雀踊子 上田紅溪 植村客遊子 魚住満潮 臼井三林坊 江国幽谷 江城修史 江副牛亭 榎本吐来 王塚紫 大塚勇 岡崎祥月

大江秋月 小笠原青女 岡田拳法 岡田某人 岡村久志良 小川静観堂 小川恒明 隱岐不酔 置田ふじ 荻野鮫虎狼 奥谷弘朗 奥村丹治 奥村形水 大坂博正 大崎良子 太田蝸牛 小田垣 大谷月都 越智一月 大鶴喜由 大西八步 小野克枝

小畑自有浪 小浜牧人 大森孝華 大森娛句楽 大山と金 大矢十郎 香川醉々 景山綾美 笠原吸江 葛城伊三郎 加藤河産 加藤貞山 金井文秋 神谷凡九郎 賀本凡九郎 河井庸佑 川岡靈眼子 川口弘生 川崎秋女 川竹松風 河原みのる 河端柳子 河股緑水 河村日満 河村瑞川

川村好郎 河内天笑 神原幸児 菊田いさむ 菊沢小松園 岸南柳 黄瀬美秋 北川春巢 橋高薰風 北村三歩 木村一路 木村千容 木村水洞 木村弥栄子 木村涼人 木村遠二 木山要次 木山醉升 草深醉門 国弘半休門 久米奈良子 蔵本白梅子 黒川紫香 桑原喜風 工藤甲吉 小池しげお 小出智子

河野君子 小島蘭山 小谷仙山 小砂白汀 高津徹也 小西無鬼 小西雄々 小松義雄 小島与呂志 兒島里風 小幡孤呂二 小林孝正 小林トメ子 小林由多香 近藤凡生 斎藤三十四 齋藤三勉 雑賀五葉 酒井三葉 坂井清子 酒野清子 佐野卜占 志賀平八 直原七面山 四方弘美 島居百酒

島田雄峯 清水一保 清水義介 清水谷句楽坊 城一舟 新谷笑痴 菅井智水庵 鈴木村飄子 傍島静馬 高木桃里 田垣方大 高杉鬼遊 高橋鬼焼 高橋千乃子 高橋操子 竹内翁童 竹内圭三 竹川河舟 竹中綾女 竹中肖二 竹浪浪寿 田中蛙眠子 田中狂二 田中十方 田中万里歩 谷中無閑

中川晃男 中川淳子 中村ゆきを 中筋三幸 仲藤どんたく 内藤幸子 内藤きさ子 飛田好一 友淵貴山 戸田求方 都倉一芽 時広一子 土岐トク子 遠山可住 天正千梢 恒松町紅 土谷城石 辻川喜仙 辻川白溪子 辻川圭水 築山快夢起 津秋六花 垂井葵水 田村藤波 谷垣史好 谷井扇水

羽原静歩 野村岬月 野村味平 野村太茂津 野田素身郎 野坂つき子 西田一栄 西田柳宏子 西垣錦風 西森花村 西野生村 西辻竹青 西川誓二 西岡洛醉 西尾青路 西尾一菜 西岡いわを 新岡回天子 永松道雄 永藤弥平 長野文庫 柳生鶴丸 中島小庵 中島英石 中島英子 永尾英断 谷井滋雀

福島鉄児 福浦勝晴 福井多蘭子 福井野迷路 弘津柳慶 平野青夜 平田実男 兵井虎声 菱田満秋 久家代仕男 馬場魚山 馬場夢生 長谷沢義英 長谷川三司 原田明春 原野独仙 林野魁光 林夢紅枝 林瑞枝 林蒼蛇楼 林葵丘 浜畑胡蝶 浜野奇童 浜田久米雄 浜田儀一 浜田光治

松下たつみ 松川杜的 松岡委滄浪 榎本路児 増田次章 正本水客 前山北海 本多柳志 本田惠二朗 本多清人 本庄金三 堀江正朗 細呂木魯木 古川麗花 古川静波 舟木与根一 藤村べ女 伏見茂美 藤田軒太楼 不二田一三夫 藤岡花梢 藤井明朗 藤井二三三 藤井春日 福間清日 福田丁路

残暑お見舞い
申しあげます

川柳塔社参事一同
同常任理事一同
同編集部一同
同句会部一同

村上旭童 三輪峰円 宮西弥生 宮地双葉 宮口笛生 宮川珠笑 宮尾あいき 光好陽子 水粉千翁 水谷竹荘 三井醉夢 満生拜山 間島青丹子 丸川初甫 松本信雄 松本忠三 松本吉太郎 松下梁水

横山一照声 行吉照路 山本立児 山本素郎 山川阿茶 山内静水 保西岳詩 八木摩天郎 八木千代 森田布堂 森田茗人 森下愛論 森川すみれ 森井菁居 室谷徹舟 村山光輪 村田瓢太 村上春巳

渡辺乱坊 渡辺独歩 渡辺暁童 脇本椰子郎 若柳潮花 若本多久志 若本あき坊 和海草春 山田千太郎 山上千太郎 若林草右 和田一乃字 和田紅月 吉田圭井堂 吉田水車 吉田美房 吉岡通児 吉岡青香

余名の新記録。還暦という船に乗り船を漕ぐ。祥月氏自筆の手法が好評。

▼浜田久米雄氏(岡山県同人)から「路郎忌にはありがとう存じました。栞邸で一泊、倉吉の弘朗さんと一緒でした」備前川柳社とうん祭は七月十七日金剛荘で開催。

▼河村日満氏(鳥取同人)は路郎忌句会から十二日の「やくも」で帰鳥、二十日から東京へ出張陳情、招待されている祥月還暦句会への出席も覚束なく、長崎の原爆忌へも出席が決まり、多忙の八月を迎えられた。

新同人紹介

景山綾美
大森孝華
中島英子
生々庵・明朗・白汀推薦
木村弥栄子
小松園・摩天郎推薦

は七月二十五日の三越劇場での浴衣会で常盤津の「廓八景」を踊られた。なお、潮花氏の母堂そよさんは八月四日十時十分老衰のため自宅で永眠、享年八十四歳

▼奥谷弘朗氏(鳥根同人)は路郎忌の夜、久米雄氏と栞邸で一泊、意義のある上阪であったと。「雲の峰仰ぐ同志の塔が映え」

▼清水一保氏(鳥取同人)は七月二十一日行政視察に北陸路へ、広い富山平野で都市計画の百年の大計の夢を描かれた由。兼六公園で「百万石の偉容は松の羽振りにも」

▼浅野芳朗氏(小松同人)

から「編集を交替して、しばらくウォーミングアップをするこにしました。なお、イタイタイ病とは諸物価の値上げのことですね」

▼林蒼蛇楼氏(ハワイ)から「快夢起氏は身体都合で会計を曉舟氏に。魔法麗氏は直腸を手術され、あき坊氏は神経痛で入院、目下退院後自宅療養中という状態ですが、自分は元気でウイロー社の幹事役に尽力しております」

▼朝日新聞七月二十八日夕刊紙上で「難解句めぐり活発な論争」と題して最近の俳句川柳誌から抜き書きして論評されている。川柳塔誌から北川春興氏の「その句に対する共感者が多いほど名句であり、生命のある句だといえる」が掲載された。

▼第四回島根県芸術文化祭参加芸作品が公募されて

参加芸作品が公募されて居住者および島根県出身者のみ。一、応募資格 県内表作品一人三句以内。三、応募先と締切り 九月二十日(月)までに松江市内中原町島根県立図書館奉仕課内文芸係へ。四、応募方法 官製ハガキを使用し、川

柳と朱書して作品を記し末尾に住所氏名を記入すること。五、審査員 柴田午朗 黒目大鳥、匿録之助。六、入選発表 十月二十日(水)

▼第二十回記念山口県川柳大会が山口市民会館で九月十九日十時、十六時開催。題・狸・責任・白バイ・青年・動く・視線・市長室・七十年代・各二句。投句料二百円。お問い合せは山口市円政寺町、金子下けし宛。

▼佐野ト占氏(八代同人)は学校関係の旅行で忙殺されている。熊本の中辰二先生亡きあと美喜子奥様を中心に川柳研究を發行しているが、会員も減りさびしい限りです。

▼石川兼郎氏(明石市)から東野大八氏の随筆は毎号のピカ一。川柳家の暦は興味しんしん、白柳さんの業績を讃えますと。

▼章第二号に福永清造氏が調和の道を執筆。ぐるうぶの近詠 十四氏の力作がならぶ。

▼野村可通氏の「伊勢古市考」出版記念祝賀会が八月十五日に大安旅館で開催。A5版上製美本二二〇円。伊

勢市古市町一八八、野村可通。

▼同人旅信 佐世保から若本多久志氏「ジャガタラの哀史を秘めて平戸城」弓張りよう病い抜けた事やと旅山から「大峰の西のぞきは雨が止み。隠岐不静氏は隠岐から」牛突きのもも行司も堂に入り。福田丁路氏は東北地方から「団体にまじり説明ロハで聞き」

▼阿万方の氏(大阪同人)は十月十五日から三十日まで明石デパートで飛鳥大和の作品展をひらかれる。

▼南海川柳会、九月十六日題「前売り・素直・据置き」ナンバ高架下親和クラブ。

救急車不吉の音を撒き散らし
助からぬような音出す救急車
救急車我が家の幸せかみしめる
救急車屋根は屋根で手をかざし
救急車保険医辞退の街よぎる
一方通行を逆に救急車の砂ぼこり
救急で来て霊柩で帰るなり

兼題「釘」

菊沢小松園選

性格が古板の釘みんな抜く
さぞや熱ッ苦しかる棺の釘音
捻釘の融通利かぬ左巻き
素人の金槌釘に見くぬられ
まっすぐに打てどなめにすねる釘
気短の手足を打てばまた曲り
曲り釘のばして打てばまた曲り
運の良い釘で真つ直ぐ打ち込まれ
素人の釘あっちへ出こっちへ出
折れ釘をのばしてとしよりのやが
棟梁がすかたんを打つ支払い日
釘箱の釘大きすぎ小小さすぎ
釘素直きつちり曲つてうちこまれ
しろうとに打たれてへそをまげ釘
迷信のかたまり釘も打たせない
棺の釘待たせてオモチャ入れるママ
棺の釘喜怒哀楽を閉じ込める
釘抜いた傷が正面よく目立ち
釘さされ乍らおしやべりまだ続き
日曜大工へさからうように曲る釘
靴屋の釘は手品のように出る
日曜大工手頃な釘が見付からず
素人の釘は一本余計打ち

どんたく 薫風 恒明 静馬 章雅 小松園 摩太郎
日満 静観堂 百酒 一栄 軒太楼 久司 眉水 与呂志 天笑 凡九郎 迷朗 圭井堂 静馬 鬼遊 一治 維久子 六竜子 雀踊子 庸佑 天笑

邪魔になる釘が時々使われる
素人も大工も同じ釘で打ち
一本の釘にも心通わす
棟梁の釘飲んでてもしよか打ち
一本の釘もまともに打てぬ夫
金婚迄さびついたままの釘で耐え
小さな善意足袋片足も釘に掛け
パチンコの釘一本におどらされ
寡婦の悲しさ釘にまであなどられ
マンションに住んでも古釘貯める
素人の細工と判る釘の数
釘一つ打てぬ男で詩を詠み
蚊帳吊った頃の釘なり抜かずおく
釘さしておいて笑顔を取り戻し
本職の手にはすなおな釘となり
一本の釘が最後を持ち耐える
棺の釘打つ音胸につきささる
釘打たぬ約束つきの部屋を借り
独身は釘ヘズボんもシャツもつり
ど釘の一本の釘利いづくも
どの釘が効さるやらわかんなく打ち
釘一つ曰くがあって宮大工
妾宅で釘打つ旦那見て帰えり
釘打てば建売らしい音がする
パチンコの釘意地悪い曲りよう

兼題「壁」

西尾 菜選

重文の重荷へ壁が崩れそう
上塗りは来年法事まで延ばし
初めから穴あけておく城の壁
悲しみも喜びも長屋壁一重
しきたりの壁を破った嫁でよし

一治 緑水 緑水 摩太郎 生々庵 千乃子 緑水 次章 柳宏子 水客 肖二 肖二 多志 美房 水客 恒明 柳志 儀一 新之助 小松園 久司 軒太楼 本陸棒 百酒 一栄

惨劇の血しぶき壁語る
荒かべのここで資金が切れました
壁一面ヌードを貼って満たされず
台風を隣の壁に助けられ
許されぬ距離三寸の壁を見る
人間の壁をはずそう大ジョッキ
明日からのくらしに触れる壁の色
落武者の唄ある里の白い壁
壁たたきあって独身風呂にゆく
前向きの姿勢壁によう当り
新記録あと一秒の壁厚し
壁一つへだてにみんないドラ持っ
かにかくてに倉敷はよし白い壁
しきたりの壁を破って四面楚歌
先ず壁に心を配る大使館
この左官死ねば塗れない本聚楽
建売りの壁ゲンコツで叩いて見
白壁の厚みがさせるふところ手
壁に足のばして心痛んでいる
壁はい当選御礼の文字躍如
科学する心は壁にたじろかず
壁穴を選挙のポスターで押えとき
剥げ落ちた壁の中なる居住権
はりぼての壁に幸せ盗まれる
自由でも人種差別の壁がある
薄くとも壁が守っている世帯
古時計外せば壁に歴史あり
隔離室壁の厚さにある安堵
壁一重つんばになっていたいこと
とびこんだ前途にどっかと厚い壁
ごきぶりの恋は手抜き壁で会い
壁一重あって平和の嫁姑
酒蔵の壁は絵になる影おとす
夕焼けに白壁の街落ちつかせ

三十四 鬼遊 柳宏子 千乃子 静馬 雀踊子 小松園 葵水 維久子 静馬 一三夫 多志 滋雀 圭井堂 静馬 新之助 水客 誓二 緑水 摩太郎 緑水 天笑 緑水 新之助 鬼遊 あいき 恒明 迷朗 天笑 生々庵 古方



▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

南大阪川柳会

金井文秋報

せつかちの歩調に突っかけ脱げたる
それからの二人に時計速すぎる
バネのきくうちは女も従いて来る
やり玉に上げて人柄にくまれず
時計屋の時計自由な時を指し
生活へだんだん背伸びする望み
やり玉を受ける覚悟できた代理
ほのぼのと希望が持てた面接場
くたびれたバネで赤字も負う電車
お骨だけ貰い日蔭の路地に住む
望んで貰うて金婚までできてしもた
バネのよい社長おどらす奥の声
臨時雇い骨身を惜しむ汗を拭き
お早いお帰りでどこかお悪いの
全身がバネになつてゐる女子パレー
ハイミスの望みは遠く夢と消え
望み通りと添うた当座は思うと
バネとウマ合う日パチンコもは入り
バネ効かぬエスカレータを踏み外し
やり玉にあげられ人生観変える

柳宏子 好郎 圭井堂 柳志 醉々 花千子 誓二 新之助 一二三 古方 一舟 古方 滋水 肖二 形水 文秋 金三 鬼遊 智子

鶴の自由がっちり鶴匠の手が握る
バネのきく足で蹴らたラッシュアワー
バネ仕掛の人の形のように只今立候補
だんだんと祖父の望みは欲ぼける
早い話がと言いつつ長話 綾女
やり玉の工場のおかげで食うていけ
如才ない揉み手に隠す土性っ骨 章雅
不肖の子に親の願ひは大き過ぎ 敏子
骨折つて骨の存在やっとなり 敏子
川柳たけはら 森井蒨居報
馬券買う列に居て今日の運季賛
親だから子等のタクトを振って見な 扇水
菜の花を牛乳びんにさしひとり 日出夫
演出は造花の桜父の喜寿郷愁
倅せは堪える慕情にはぐくまれ 西合
ふたありの仲を知てるレモンティ 秀子
盆栽の梅正札をつけて咲き 五湖
長生きの秘訣を亡父に聞き忘れ 大陸
猫柳すぐに折れぬ命なるのり子
町のボス辞めて腑抜けのようになる 泉
ずばりもの言うてやっぱりいた味方 錦吾
両方の言い分聞いてまた迷い 和子
パンタロン男のように肩を組み 清太郎
白足袋をはけば神経質になり 貞子
半病の僕に日に日に柳の芽 雅鳳
熱すぎる視線背中に痛いほど 淨美
武者人形夫のだけで子が居らず 政己
妻が寝て子が寝て私になつてゆく 不朽
反抗心ムラムラ何処へ隠そうか 美佐雄
保育所に行かせて祖母は淋しがり 春昇
蟻の国国民服は黒に決め 凡女

黙否権発動妻にも意地があり
作業場の窓へさくらの普明閣
だこしてほしいもみじの手が踊る
ついに来た病棟の友さり行く日
振り向いた女も派手な柄が好き
愛とは何ぞや辞書引いてみる
友が居て師がいて故郷なつかしい
切り出せぬまま酔うてしまいたい
社運隆々労働組合など要らず
倅せは歌にだけある世ではなし
春たけなわ栄転便り花だより
玄関のせまきになれて靴の位置
ミン踏む妻のよなべに夢があり
踏まれても踏まれても雑草春があり
若草の匂いの中にいる二人
お互いに親馬鹿なのに気がつかず
ティールーム職場の憂と触れまじき
蕨居
どんぐり川柳会(大阪市) 川村好郎報
家元もわたしも同じ花を活け
昨日とは違う話にもめ直し
嫁ぎゆくひと日ひと日の花鉢
芍薬を生けてみせたや亡き母に
花生けて涙を見せぬ見舞客
花生けてはわからないから花器を賞め
花生けて女満足そうな顔
気のりせぬ見合いの花を生けさせ
枯れきった大木の根に花生きる
ご機嫌の証抛玄関花を生け
花のない花瓶へ女過去を追う
花生けてやすらぐひとの瞳がきれい
借用証書く手に百合の香が満ちる
英詩 房子 こふみ 正俊 秋子 不動 静火 静水 天石庵 紫苑荘 鬼焼 松緑 蘭幸 蕨居 鬼遊 緑水 生長 比呂郎 勝恵 弥生 保翠

昨日まで辞める気のない辞表書く
逢いたくて昨日の嘘が気にかかり
無為腰食光らぬ昨日の靴を履く
逃げ腰の客とは知らぬアルバイト
逃げ腰の浮気するからバレルのさ
活け花の師匠にもある邪推かな
生け花も春の名残りの色となり
祝賀会昨日の敵に手を叩き
まるべに川柳会(大阪市) 川村好郎報

あじさいのように心は移り出し
しあわせが微笑の中でよくわかり
土地ブームなど知らぬげにする田植
一つだけスイッチ忘れて 独身部屋
喧嘩せぬようになつてのすさま風
五月風箏筒の底の冷やかさ
何気なく髪にやる手がものを云い
子供まででれて見ているママの髪
化粧落した女に似たり 銀座裏
未練切る心のスイッチ見つからず
どんぐり川柳会(羽曳野市) 川村好郎報

世渡りを邪魔する意地をよう捨てず
何くそとハンデー忘れ挑む日々
世渡りの白い杖つく足確か
百万に挑めどサラリー追付かず
世渡りの時計日毎のネジを巻く
すってんでん挑む気力も剥ぎ取られ
回復期へルスメーターへ又挑み
世渡りな一役マダムの片えくぼ
せいたくね ストだと思ふ 靴みがき
挑発に乗つてもみたい出来心
勝抜戦挑む相手とまづ握手

孝子 一治 儀史 好風 小松園 幸子 寿子 扇斗 星斗 立斗 節子 慶子 茂子 瓢太 好郎 吐来 竜虎 醉々 文作 一治 笑児 桂馬 岳太 吸江 国夫

振られても美人に挑む強心臓
挑むのをあきらめたのかへば将棋
親友も互に挑むセルスマン
世渡りは別と非力を責めぬ父
堺・若芽合同川柳句会(堺市) 吉岡青香報

薄着して風邪を知らない冬を越す
薄着して来れば冷めたい山の風
農繁期村空っぽで猫留守居
住職の外は農に出て農繁期
農繁期の汗を米価がふみにじり
農繁期予備校通いも手を借られ
長男の嫁を見染める農繁期
内風呂で働く肩を流し合い
暖かい言葉がうれし農繁期
農繁期去年の恋が顔出さず
母ちゃんは何時寝るのかな農繁期
じいちゃんの腰がのびてる農繁期
職人の煙草忘れたまま煙り
悪友を煙に巻いて水入らず
ピルの火事逃げ場失う渦煙り
落葉焼く煙草 風情が窓を明け
寒いのに煙草 嫌いが吐く父よ
一服に悔いなき煙吐く父よ
青空だす此が都会の青空だす
日帰りの旅はとなりへそと出る
日帰りで行けぬ釣だと決めている
日帰りの旅でもいいとねだられる
日帰りで出てもお土産何にしよう
補助券を持ち寄り 日帰り誘ってくれ
日帰りのとこを公費で一泊し
父帰る二時打つ時計無表情

宝恵 秀果 チエノ 好郎 青香 誓二 つき子 きみ子 圭井堂 柳太 摩天郎 信天翁 柳志 小松園 儀一 遊仙 草青 城南 妙子 双葉 葵香 筑前 凡九郎 一三 柳信 勝恵 宏子 茂美 狂二

日 時	会 場	講 演	兼 題	席 題	投 句	締 切	宛 先	賞	句 集	主 催
第23回大阪文化祭川柳大会 昭和46年11月21日(日) 11時 開場・12時半開会	中央公会堂(3階小集會室) 大阪市立天王寺動物園長	和田 辰巳氏	「自転車」 「名簿」 「近頃の社会記事から」	当日2題発表(12時締切) 各題ごとにハガキ1枚に2句ずつ・住所・氏名・雅号明記・郵送	11月10日着限	530北区中之島1 大阪市教育委員 会内 大阪文化祭川柳大会係 席題・兼題とも秀句に府知事・ 大阪市長・府市教育委員長から 「川柳賞」選者から「選者賞」 を贈呈。	入選句集希望者は2000円別送 大阪府・大阪市・大阪府教育委 員会・大阪市教育委員会			

プロポーズ時計は待っていてくれず
もういねと云わんばかりに見る時計
明日あるを信じて時計のネジを巻く
心にも目醒し時計欲しい日々

八尾菜の花川柳会 飯田一治報

日曜日隣の屋根も睡たそう
人生の友として論語片手に
女にも悪友が欲しい倦怠期
友達でいきましょうねとささやかれ
屋根裏の恋は協力してやれず
善男になって寄進の屋根瓦
着る物がなくなる程に児は汚し
屋根裏で作家志望をあきらめず
優勝旗受ける汚れた背番号
地下の店うどんの匂いへ足を止め
病床へ思いがけない旧い友
父と子が夜なきうどんの灯にゆれる
すねて寝た子供へうどんのびたまま
マネキンに背広を着せた無表情
屋根のないビルへ燕とまどうて
天平の屋根そり返える秋の雲
出稼ぎの父は帰えらず雪の屋根
友達が大事ですかと午前二時
友達という一線を守らされ
ゴムの木に太陽がない街の茶房
友であらうと待ったはさき王手飛車
商売の敵しさ友情挟まない
肩書をはずしてからが友の顔
ゴム長に暮しの泥が干からびる
酔いまわるほどに親友にしてくれる
病床の君に着せたい服ばかり

静馬 徳子 笑痴 好郎
飛鳥 千歩 美代 寿
柳信 静馬 鶴路 一治
トメ子 勝恵 雀踊子 弥生 凡吉 鶴翠
酔々 雄峯 葵水 鬼遊 茂雄 形水
欣之 薰風 牧人 警二

未亡人小屋根の多い家に住み
立ち喰いのうどんへネオンが消え
ゴムを焼く匂いでスラムの日が昏
友の背を叩けば遠い日のリズム

ワイロー社(ハワイ) 明春報

手助けになると思えば嫁に行き
内助の功ただ黙々と蔭におり
紙一重神の助けを信じきり
助けたと云わずに君の功祈る
助役には助役としての意志表示
世の波におされ助産婦 かげを消し
メデイケアの援助で余生 永らえり
窮すれば通ずで妻の へそくり
迷信が助かる 命棒にふり

駒つなぎ川柳会

歌謡曲ほどでなかった港街
二波三波ストと線との根比べ
重役が小さく見えるストライキ
下駄の音わざとらしい浮気者
窓ぎわは女が占めるハネムーン
酒を借る強さを女将あわれがり
ずばら者又カンニングをばして通り
近付けば声かけられそうなひとり旅
浮気した顔一つ せす 旅戻り
母の日をせめてずばらになれと云い
強がつて見ても足腰付いて来ず

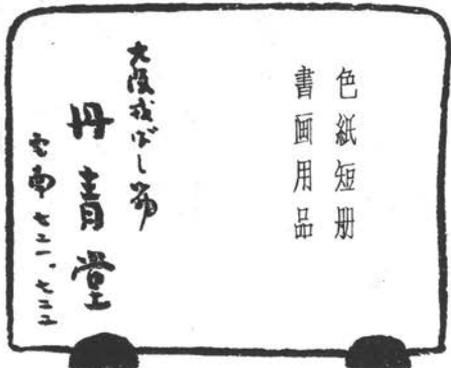
丸文川柳会

竹内翁童報

働いてな お働いて 頭金 敏雄
いそがしく 働く母の 冷い手 功
靴ずれの 痛みこらえて 祝辞 翁童
飲んだとて 靴の感じは 忘れない 黙生

未亡人ブーツをはいてどこへ行く
アパートの年始廻りは隣りだけ
威儀正しと年服で招く年始客
ハイヒール重量オーバーらしい靴
朝顔よいくら咲いても今日限り
ハレンチな花が咲いてる夏の海
髷面の花束ほかに当があり
花枯れて女が匂う 事務所なり
ブスの娘も恋知る 花となりました
職場の花とチャホヤされる 適齢期
二号邸主を帰えして 波の花 芳裕
去りし里はニペの花に 母を恋う 良江
野の花を君に一輪捧げたし 白桜

▼堺・若芽旬会は九月十三日夕一摩天郎宅



川柳忌句会

日時 九月七日(火) 午後六時
会場 以和貴荘(いわきそう)

阿倍野区松崎町二丁目
電話622・1275番

兼題 柳話

「印相」 橋 高 薫 風
「追善」 本 多 柳 志 選
「天氣凶」 阿 万 的 選
「ポイント」 戸 田 古 方 選

大坂 坂 形 水 選
各題三句嚴守

大坂市南区鰻谷仲之町20

川 柳 塔 社

電話大阪(271)3985番

席題 三題 当日発表
会費 二百円

★投句だけの方は切手50円封入
★電話での投句はご遠慮願います

募 集

十一月号発表(9月15日締切)

川柳塔(10句) 中島 生々庵 選
近作柳樽(10句) 川村 好郎 選
課題吟(各題5句以内)

「ホクロ」 宮尾 あいき 選
「足並み」 江 国 幽 谷 選
「通 訳」 工 藤 甲 吉 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

十二月号発表(10月15日締切)

川柳塔(10句) 中島 生々庵 選
近作柳樽(10句) 川村 好郎 選
課題吟(各題5句以内)

「金策」 都 倉 求 芽 選
「実力」 浜 野 奇 童 選
「逆か立ち」 黒 川 紫 香 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

10月の兼題

「王座」 「寄せ書き」
「表 情」 「ハンド」

川柳塔のシンボル・バッジ 図案募集!

同人諸氏のご要望にこたえ、ここにひろく川柳塔のバッジの図案を募集することになりました。

採用作には薄謝を呈します。
ふるって力作をお寄せください。

締切 十月末日

川 柳 塔 社

10月3日は総会と二賞発表

定 価 百八十円(送料十六円)
半年分 千七百七十円(送料廿)
一年分 二千二百円(送料廿)

昭和四十六年八月二十五日印刷
昭和四十六年九月一日発行

大阪府南区鰻谷仲之町(○)番地
編集者 中 島 蓬 太 郎
印刷所 大陽印刷株式会社
郵便番号 五四二一

大阪府南区鰻谷仲之町(○)番地

発行所 川 柳 塔 社

電話大阪・二七一・三九八五番
機務口座 大阪・三三三八八番

・ペンペン草・

★路郎忌、水府忌、川柳忌とつづく。

★大阪柳界はこれからもこの暑さの中で行事を句会に織りこんでいくのである

★七月七日の路郎忌に、下関の桜川不水氏(七十三歳)と、東大阪の坂上山椒坊氏(六十歳)が亡くなった。

★八月四日の本社常任理事会で、川柳塔のシンボル・バッジを広く募集することにきめた。

★本年度の同人総会と二賞

疲労・肩こり・神経痛に

アリナミン[®]A

☆5ミリ錠・25ミリ錠・ほかに50ミリ錠 ☆食後にどうぞ
☆詳しくは医師や薬局・薬店でご相談ください。



58

発表句会は、御堂会館で十月三日に開催。

★こととして六年目の川柳塔は、本年を期して躍進の体制をとることにした。

(出席者は古方・栗・庸佑・薫風・形水・静馬・文秋・生々庵・小松園・柳志諸氏とボク)

★川柳忌にちなんで、野迷路元軍医中将閣下に東郷元帥の思い出などを執筆ねがった。

★さて、初代川柳の「あとで芽をふけ川柳」とは、川柳の社会化のことなのであらう。

★微力ながら新聞や放送などに川柳を売りこんではいないもの、あまり歓迎されないのが現実である。川柳を知らない人からは古いといわれ、知っている人から

▼偶然か東野大八先生に黒の扇子、高橋操子女史に黒地の浴衣をプレゼントして頂いた。黒、紫の大好きな私。柳人はだれの性格をもお見とらしいように思われて、コワイこと、コワイこと。

―葉子

は古川柳ほどのおもしろさがないとキメつけられる。

★西日本新聞の小泉戸牟氏と、七月に近江砂人民と会う前日、心斎橋でお会いした。戸牟氏いわく「関東では「きやり」関西では「川柳塔」の句が一貫している

ので読みよい」とは、革新や伝統が入り乱れていないということらしい。

★さらに「川柳は好きか」と聞かれ、「嫌いではないが、好きではない」と答えた。「なるほど、なるほど」とうなづく。川柳塔誌には狂信的カラーがないということなのだろうか。

★元大阪日日新聞の猪飼叔藏氏が「芸術文化」を今東光氏らと創刊した。力を借せというので川柳方面だけ個人的に協力することにした

★四年前、朝日新聞の特集「日本の年輪」に川柳がとりあげられた。東京から川上三太郎先生と岡田甫先生が登場され、大阪からボク

本年度二賞発表と同人総会の日がきまる。

10月3日(日)

三時から同人総会
五時半から二賞発表

会場は 御堂会館

何を選んでいただくかは先様におねがいして
タカシマヤの商品券をお贈りするのにも 心に
くい贈物かと存じます

一〇〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です

高島屋
大阪・東京・京都

がインタビュをうけたので不思議に思った人があったようだ。

★ネタをわればこうなのだ。大阪では不二田に会えとアドバイスしたが、芸部の田村耕介氏だった。この人はテレビなどでおなじみの演芸評論家でもあるのだ。ボクが秋田実先生の門下だったからである。

★八月号の拙文「松に従いそろかして」に社交辞令を

(不二田一三夫)

黒潮躍る 紀州路へ



＜白浜ゆき＞ なんば発時刻
 急行 きのくに6号…(毎日)…12時50分発
 急行 きのくに11号…(毎日)…16時40分発
 急行 きのくに7号…(土曜)…13時21分発

＜白浜・新宮ゆき＞ なんば発時刻
 急行 きのくに2号…(毎日)…7時45分発
 夜行直通列車…(毎日)…22時15分発

●きのくに6号ときのくに7号は座席指定席券を 他の列車は座席整理券を発売

お問い合わせ・南海交通社
 (641) 8686 (311) 5038

南海電鉄

国立公園 奥新和歌浦

・雑賀崎



国際観光旅館

うおまた
魚又楼

TEL 和歌山 (44) 0431・1186(代)
 大阪案内所 (641) 3 5 6 4

誇る
 海岸美を
 風光明媚な